

特211-564



\*1200600291509\*

特 211

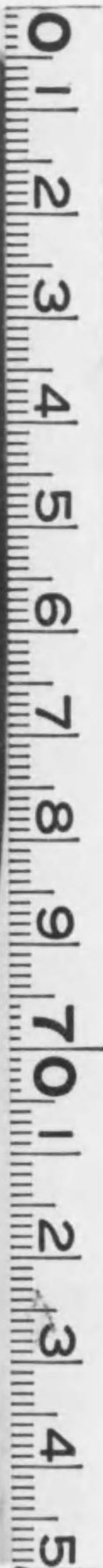
564

428

# 民族への警告

重治著

再訂版

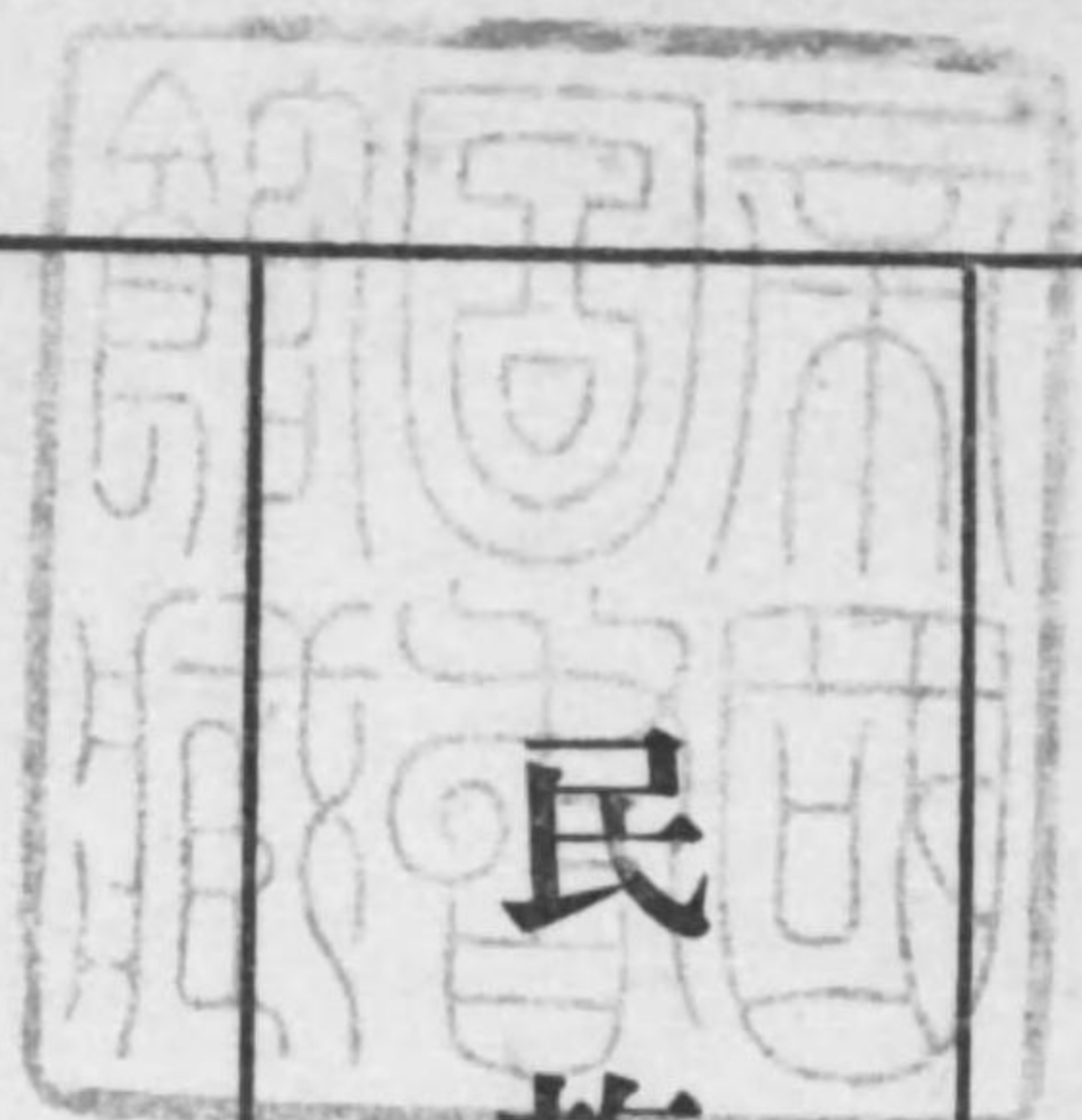


# 始





特 211  
564



中田重治著

民族への警告

ホーリネス教會出版部













## (一) 世界は最暗黒

先づ冒頭に私及びホーリネス教會の會員は舊新約聖書を悉く神の御言葉なりと信じ萬事萬端聖書に照して事を進めて居るものなる事を御断りして置く。

今は我國民にとりて實に嚴かな秋である。各自は眞摯に民族としても又一個人としても大いに考へねばならぬ。それは單に國際上の關係から大いに醒めてかゝらねばならぬ許りでなく、道德的にも宗教的にも大いなる覺悟を要する秋である。

行詰りは實に日本ばかりではない。全世界は政治的に經濟的に道德的に宗教的に實際行詰つて居る。之は唯宗教的に警告して居る我等のみがさう見るのではなく神を知らざる者もさう見て居る。

「夜は更けて」の御言葉の如く世界は深更の狀態である。實際暗黒は世界を蔽ふて居る。世界の何處からでも良いが此の暗黒の打破られんことを人々は切望してゐるのであるが、誰にも見當が附かない。否、益々暗黒は其度を加へつゝある現狀である。

## (二) 覺醒の第一歩

「期を知るが故にかく爲すべし、即ち我等は眠より起くべきの時なり」の御言葉の如く今は長夜の夢を貪つて居るべきでない、床を蹴つて起ち上りし民族は世界の何處にありや。若しも一足先に斯く曉つて起ち上る民ありせば幸福なる哉。

然るに神は此の日本民族に御眼をとめて居給ふ。然も日本に於ける基督信者の中で極く少數ではあるが、聖書を神の御言葉として其のまゝ信じ、尙聖書中最高の眞理なる基督の再臨を熱心に俟望んで居るホーリネスの群に特別に御眼をとめて驚くべき覺醒を與へて居給ふのである。其れは今より四年前に聖靈を降してリバイバル（信仰覺醒又は復興）を起し終末に關する驚くべき眞理をそれからそれへと教へ示して居給ふ。たゞに預言に關する眞理が開かるゝのみならず、我大和民族が此の末の時に神より大



使命を與へられて居る事をも示されて居る。遂に昨年末どうしても之であるとして其の示された處を講演し、尙之を『聖書より見たる日本』と題して本に著してあるから御覽を願ひ度い。

斯く神は日本に在る我等の如き小き群を先づ目醒して而して世界で一番先きに日本を覺醒せんとして居給ふ。然る後急速に我國から世界に向つて呼びかけんとして居給ふのである。

さて覺醒して見ると我等の感ずることは世界は全、暗黒である。人々は何等定見なく右往左往して居る有様である。併し我等は、あの學者、この政治家と人に目をつけない。天の彼方にある光、即ち『暗き中にも光あらはる』と言ふ御言葉通りに或は又『人いまは雲霧に輝やく光明を見ること能はず、然ど風來たりて之を吹清む』(伯三七〇廿一)の如くに最暗黒の彼方に光明を認めて居るのである。又ペテロ後書一章十九節に『殊に預言者の確言われらに在この言は暗處に輝る燈の如きものなり』の如く神よりの光、即ち預言の眞理を與へられてゐるから世の人の如く暗憺たる現狀に對しても失望落膽しないのである。暗黒には違ひないが、今暫くである。やがて光明が現はれるといふ大希望を持つて居るものである。

(三) 太陽の地理的考察

『夜は更けて日近づけり』。私は先づ之を地理的に考察せざるを得ぬ。私は屢々世界を廻つて知つて居るが、暗夜が明け放たれて世界で一番初めに太陽を拜するのは日本である。日本から世界の一日は始まる。之は決して牽強ではない。西洋人もかく言つて居る。コケツコーと鳴く一番鶏は日本からである。私は今之を精神的に言つて居るのではなく物質的に言つて居るのである。世界の第一日は日本から始まる。世界の暦は日本からである。何んと不思議な國ではないか。



(四) 太陽の心靈的考察

「夜は更けて日近づけり」次ぎに私は之を心靈的に考察して見たい。私は決して國民的傲慢から言ふのではないが世界の暗夜が明け放たれて光明が来るのは日本から始まる。聖書の他の箇所即ちエゼキエル書(四十三〇二)に「神の榮光東より」と書かれてある。之も光明は日本からであると云ふ意味である。

若も神が世界中を目醒まさうと思はゞ大したことはない。一年と二年とかゝる必要はないのである。例へば最初に日本に現はれた光が一時間後には支那全土を照し廿四時間後には世界中に行き届くのである。心靈的にもさうである。之は神に於ては大したことはない。

之が若し教育の結果となると十年や二十年で埒があくものではない。されど神より来る光(或は力)によれば瞬間に成される。私の言ふ處は先づ日本が醒めねばならぬといふ事である。さうすれば諸外國も之に續いて來て醒めるのである。神を知らざる人々はその制度、此の方法と種々腦漿を絞つてゐるが、そんな事ではない。國民として醒めるのは太陽なる基督を迎へる事である。

(五) 「日の丸」の國旗

私は數年前米國から歐洲各地を廻つた時、日本の國旗を見る毎に懐しく思つた。之は海外に出て見た者でなければ解らぬ處であるが、彼處此處の波止場で日本の國旗を掲げた船が港に入つて來るのを見た時は何んとも言へぬ感がして、時にはホロリと泣けた。人は私を感傷的だと言ふかも知れぬが、私には之は何んの爲だか解らない。私は矢張り日本人で久振り異境で自國の國旗を見た爲か、或は又私には愛國心が有る爲か、とも思つて見た。しかし私はもう一度出來る丈感情を靜めて考へて見た。今まで日本などは勘定に入れてなかつたのに此處數年の中にめき／＼と、頭角



を現はしてこんな異境の地にも商船を送る様になつたので嬉しくなつたといへばそれ迄であるが、私はそれと聯想して聖書の中に『それは神エホバは日なり盾なり』とあるから若しも神を形で以つて表はすには「日の丸」が最も善いと思つた。

他國では神を十字架で表はして居るが、私は舊約から新約に移るシンボルがあるとするならば日だと思ふ。聖書には神を日として表はし又義の太陽、光としても表はされ、キリスト自ら御自身を日として表し給ふた。若しも私が此處に「日の丸」の國旗を持出したとするならば人々は彼も矢張り愛國者だと言ふかも知れぬが、人々に神を示すには太陽程たしかな物はない。又之を國旗として居るとは何んと不思議な國ではないか。

### (六) 太陽の宗教的考察

「夜は更けて日近づけり」併し眞の意味は宗教的解釋に由らねば解らない。六ヶ敷

しい言葉で言へば配時的眞理 (Dispensational Truth) に由るに非ざれば解るものではない。即ち神は一切の出來事を時代／＼に配置してあるのであるが、今や六千年間世界を攪亂して來た暗黒の王なる惡魔が全く滅されて、義の太陽なる主イエスキリストが再び來り給ふ (再臨) 時が切迫して居ることを意味するのである。

世の學者又智者はどふ云うか知らねど基督が再臨し給ふのでなければ此の行詰りを打開する事は出來ない。歐洲大戦後に締結した平和條約などをあてにしても駄目だ。あれは暗黒の力の寄集りが作つたので、あんな條約で世界の平和を保つ事が出來るなれば大したものであるが、そんなことで決して出來るものではない。之は日本に於ける我々が言ふのみならず聖書を信仰してゐる世界中のものはあれは一九一八年の十一月十一日午後十一時に調印したものであるから不完全なものだと言つて居る。(聖書數理學では十一を不完全數と云ふ)

我等は世界の平和はどうしても義の太陽、平和の君なる基督が再臨するのでなければ



ば來らないことを知つて居るので『主イエスよ來り給へ』と日夜神に祈つて居るのである。神は此の祈禱に應へて主基督を速かに遣り給ふ。而して基督の再臨を待つて居る者は世界の何處にも居るが、こんなに熱心に祈つて居る群は日本の外にはない。私は此の意味に於て、地理的にもさうある如く、日本が一番先に基督を御迎へすると信じてゐる。神が此の日本に祈禱の群を起し給ふたのは偶然ではない。

(七) 民族覺醒の實踐的方面

『是の故に我等暗の行を棄てて、光の武具を着るべし。我等は日のうちに歩む如く、宜しきに適ひて歩むべし。宴樂また酔酒に歩む勿れ、房事また好色に歩む勿れ、誹また妬に歩む勿れ』然り、今にも光の主なる基督が顯れんとして居る時に我が國民は暗の行を避けねば成ぬ。酒や色に身を汚し、魂を腐して居ては再び來り給ふ聖き基督様の御前には出られない。一足先に目醒ましめられた我等は、愛する同胞に酒飲む事を

止めよ、姦淫を止めよと警告する。不潔な事をして神に逆ひ、暗黒の中を歩み平氣で罪を造つて居るべき秋でない。今や我が民族は光の子として、世界に向つて進まねばならぬ秋である。甲が罪を造り乙が地獄へ行かうと神様は何とも思はない。併しそんな罪を造つて居ては此の民族に神が與へ給ひし大使命を全うする事は出来ない。自己の満足、自己の快樂のみを追ひ求め、自分さへ面白おかしく行つて居れば、他人はどうかうなつても良いと云ふのなれば日本國民ではない。今や大和民族が總がかりで立たねば成ぬ時である。されば身體を壊し、魂を弱める様な事は止めよ。宜しく『光の武具を着るべし』此の光とは何か、基督御自身である。基督御自身を着、太陽に包れることである。

如何程意地張つて見ても、元氣を出して見ても自分の決心や我慢では駄目である。然るに罪の肉體を攝りて此の世に臨り、十字架に釘りて死し、陰府の門を破りて甦り今も尙父なる神の右に在りて活きて御座る御方を着る時に光の子として世に立つ事



が出来るのである。言葉を換へて言へばイエスキリストを着るならば罪を造らない許りか罪を憎み、悪に染まずに、光の子として世を過すことが出来るのである。

(八) 非常時日本への最高の奉仕— 警告

最後に嚴かに申上げ度い。其れは「主イエスキリストを着よ」と言ふ御言葉である。我等の眼には見えぬが、キリスト様は今神様の右に座して我等のために執成して居給ふ。へブル書を見るならば「是故に彼は已に頼て神に就る者の爲に懇求んとて恒に生れば彼等を全く救ひ得るなり」(七章廿五節) 即ちキリスト様は「我を救ひ給へ」と基督の名を呼ぶ者の爲めに、神に向つて「我名を呼ぶ彼等を救ひ給へ」と執成の祈禱を成して居給ふのである。即ち今祭司の務に當つて居給ふ。されば「主イエスキリストを着よ」とは、祭司長なるキリスト様と同じ祭司の衣を着て、同じ任務に當ることである。滅び行く民族の爲に、又我が愛する同胞の爲に祈る事である。

今日日本で必要なる人は頭を捻る者や又金を儲ける者も必要であらう、されどなくてはならぬのは熱血を濺いで神に祈る人である。我國に神が與へし大使命を遂行する爲に或る意味から言ふならば日本を背負つて神に祈る人が欲しい。神も亦斯る人を捜し求めて居給ふ。自分には地位も學問もないが、願はくは斯る禱告者になりたいと言ふ人は「主イエスキリストを着よ」。されば神は我等を斯くの如き者と成して下さるのである。我等普通一般の耶穌教信者ではなく、非常時日本を背負つて全智全能なる神に祈る、能力ある禱告者とならん事を希ふ。之は又祖國日本に對して最高最善の奉仕である。



## 知られざる一國民

「なんぢは知らざる國民をまねかん汝を知らざる國民はなんぢのもとに走りきたらん此はなんぢの神エホバ、イスラエルの聖者のゆゑによりてなり、エホバ汝を尊くしたまへり」(イザヤ書五十五章五節)

## (一) 大患難時代の到来

以下聖書の上から最も重大なことをお話し致し度い。此の世の中は斯様な有様で何時迄も續き行くものとは思はれない。世は全く變つて、全世界に前古未曾有の大患難時代が到来するのである。之は聖書に明記してあるから斯く言ふのである。聖書にある許りではなく、此の世の有様を見て多くの人は心配してゐる。誰も樂觀してゐな

い。どうしても之は大混亂になると思つて居る。即ち考へのある人は必らず、近々の中に恐るべきことが起ると言つて居る。之聖書の言ふ處と一致して居る處で、聖書は之を『患難時代』と稱して居る。

眼の開けた基督信者が日々に神に祈つてゐる祈禱がある。それは『主の祈禱』であつて、その中に『我儕を試探に遇せず惡より拯出し給へ』といふ一句がある。此の『試探』といふ語と『患難』といふ語とは原語に於て一つである。此の祈禱の意味は此の世界に大混亂を來らせて下さるなどといふことではなく總て此世界には世創つて以來なかつたといふ大患難時代が來り、全世界の人といふ人は皆之に遭はねばならぬのであるが、その患難に遭はせないで済むやうにして下さいと言ふ意味である。又茲にある『惡』とは此の世の罪惡のことではなく『不法の者』(The lawless one) 即ち偽キリストのことである。今や偽キリストは現れんとして居る。國際聯盟を世人はどう思つて居るか知らぬが、あれは偽キリストの先驅者である。國際聯盟が出来た當初から聖書



の預言を信ずる人々はさう申して来た。「平康からざる時に平康平康といふ」類で、斯るものに因て決して世界の平和は来るものではない。聽て之が人格化する。言を換へて言へば、一個の人間によつて聯盟が支配せられる。即ち偽キリストが来るべき患難時代の立物となるのである。

## (二) 偽キリストの出現と猶太人の奇禍

患難時代の到来と共に全世界の人類は非常な困難に遭ふのであるが、その時最も惱むのはユダヤ人である。

彼等はメシヤ（受膏者）の出現を俟つて居る。メシヤ來りて彼等を救ひ又全世界を統治すると信じて居る。之は我等基督信者が申す處のキリストの事である。我等は舊新約聖書を神の聖言なりと信じ、一度人間の姿をとりて來つたイエスキリストは死にて三日目に甦り、今父なる神の右に在つて我等の爲に禱告して居給ふのであるが、

聽て再び此の地上に來ることを信じ、日々熱心に「主イエスよ來り給へ」と祈つて居るものである。世には基督信者が多くあり、又基督の再臨を信じて居るものもあるが、我等程熱烈にキリストの再臨を祈つて居るものは極く少ないであらう。

斯くユダヤ人は我等の基督、彼等の所謂メシヤを只管俟つて居るのである。之に附込んで彼等を誑すのが偽キリストである。さて茲に一言して置かねばならぬことは過日も貴族院協議會に於て赤池濃氏は「國際聯盟の影にはユダヤ人の秘密結社が暗躍して居て、ジエネバに於ける紛擾は彼等の陰謀の結果である」とユダヤ人を攻撃して居た。勿論ユダヤ人と言つても皆善いものゝみとは限らぬ。ロシア革命にはトロツキーや其他多くのユダヤ人が參加して居り、彼等は神をも聖書をも信じて居らぬのである。併し茲に申してゐるのはそんなユダヤ人のことではなく、眞面目に神と聖書とを信じ、又只管に平和の君なるメシヤの降臨を俟望んでゐる者を言つて居るのである。之を辨へずして何もかも一緒くたに悪様に言ふのは大いなる謬見である。併し彼等



はやがて来る患難時代に於て久しく俟つて居たメシヤは之であらうと偽基督を基督と誤信し、その結果散々非道い目に遭ひ、今彼等は世界の富の三分の二を有つて居ると言はれるがその時皆之を偽キリストに騙されて捲き上げられて了ふのである。その果に漸く醒めて眞のメシヤ即ちキリストを呼求める様になるのである。

### (三) 知らざる民の擡頭

さて茲に今現に世界中に散ばつてゐるユダヤ人を集め、偽キリストの正體を暴露して彼等を救済する役割に當る偉大なる國民がある。『知らざる國民』とはそれである。聖書は之を單數で現はして居り、英譯聖書には A nation (一つの國民) となつて居る。而もそれはユダヤ人の思ひもよらざる民で、未知の民であると書かれてある。數千年間彼等の接觸して來た國民に亞細亞人は尠なく、主に歐米人の間に生活して來たのである。而して歐米人等は今より約二千五百年前に國を失つた猶太人をばジユウ

と侮り、其の力量に於て又知識に於て到底彼等に敵はないのに拘らず、彼等を馬鹿にして來たのである。夫故ユダヤ人も基督教國の民程悪い者はないと思つて居る。耶蘇の會堂の前を通る時唾を吐きかけて行く程である。又期到らばこの白人等に仕返しをしてやらうと俟つてゐるのである。何故かならば自ら基督教國なりと稱し、教會に於て愛を説いて居りながら、彼等を虐殺し、非道い目に遭せて來たからである。

然るに聖書は彼等を救ふ一つの國民があると記してある。それは我國の建國、神武天皇即位の少し前に、預言者イザヤに神が『知らざる國民』と書かしめ、末の時にユダヤ人を救ふやうに定め置き給ふたのである。實に驚くべきことではないか。之は決して歐米諸國を言つてゐるのではない。然らば何處の國民であるか。

### (四) 『知らざる神』の註釋

『パウロ、アレオ山の中に立て曰けるはアテンスの人よ我なんぢらが毎事に鬼神を



敬ふの甚しきを觀る、われ途を行とき爾曹が敬拜ふところの者を見しに識ざる神にと刻書し一の祭壇を見出せり故になんぢらが識らずして敬ふ此者を我なんぢらに示さん(使徒行傳十七章廿二節、廿三節)

この記事は使徒パウロが亞細亞から歐羅巴に渡りギリシヤのアテンスにあるアレオ山に行つた時の出來事である。その頃ギリシヤの文化は非常に勝れて居たが宗教的には遙かに劣つて居た。彼等は平氣で様々の偶像を拜んでゐたのである。されば文明國必らずしも勝れた宗教國とは謂へない。

パウロは文化の淵藪とも言ふべきアテンスの邑を歩いてゐた時、丘の上に建てられた「識らざる神」と記した一つの祭壇を見出した。それは彼等の哲學からも理學からも割出すことが出來ない、而も眼にも見えず、形にも現はすことが出來ぬが、宇宙間に不思議なる一つの能力があると悟つた爲か「識らざる神」(Unknown God)と彫書けた一の祭壇を祭つてあつた。パウロは早くも之を見て取つて「識らざる神」とは如

何なる神であるかをアテンス人に知らせたのである。即ち人の手を以つて造つた偶像ではなく、天地萬物を造り又之を支配して居る目にこそ見えぬが活ける眞の神である此の神は過ぎにし日には人手を以つて造つた偶像を拜むことを見過しにし給ふたが今となつては之等から離れ、眞の活ける神を拜すべきであると言つたのである。實に達見ではないか。併しパウロが「識らざる神」とある祭壇を見た時に、此神を知らせなければならぬと感づいたのは神の聖靈の示しに由る事である。

(五) 「知らざる國民」の註釋 Ⅱ 大和民族

パウロに「識らざる神」を示し給ひし神は、此の末の時に「知らざる國民」を示し給はぬ善はない。世界の五大強國の中でユダヤ人を迫害しないのは日本だけである。然るに最近我國にも獨逸邊で出版されてゐるユダヤ人反對の書籍を譯して、彼等の尻馬に乗つてユダヤ人といふものは悪い者のやうに言つて居るものがある。今や我國は



國際聯盟をさへ脱退せんとしてゐる秋ではないか、彼等の尻馬に乗つてたまるものか然し有難いことには、神は今日迄此の國を護つて、ユダヤ人に敵せしめないやうにし二千五百有餘年の間此の國を哺み育て給ふたのである。即ちイザヤ書五十五章五節の「知らざる國民」とは吾が大和民族を指すのである。

或る人々は日本が世界を相手取つて戦争することの他は考へてない者があるが更に進んで考へる必要がある。戦争もするであらう、又爲さねばなるまい。我等純福音を信する者は一部生半可な基督信者の稱ふる如く非戦論ではない。聖書の中にも「戦争に於て勇しく異邦人の陣を退かせたり」とあり、又主イエスでさへ「衣服を賣て刃を買ふべし」と言ひ給ふた。之は決して心靈的な事ではなく、事實斯くなすべきである。基督信者は皆生やさしい非戦論のみ唱へてゐると思つてゐるのは認識不足だ。

患難時代の時に世界に亘る大戦争が起るが、その時白人等を取つちめ、ユダヤ人を故國パレスチナに歸す様にするのは日本である。之は何も歐米人を苦しめるためにや

るのではなく、ユダヤ人の建國を日本が援ける役割をするのである。ユダヤ人の建國を援けるものは決して、散々ユダヤ人を苛めて來た歐米人ではない。「日出る國」の日本である。此の事は拙著「聖書より見たる日本」の中にも書いた事であるが、黙示録七章一節から四節「此後われ四人の天使地の四隅に立て地の四方の風を援とめ地上にも海の上にも樹の上にも風を吹せざるを見たり。又この他の一人の天使活神の印を持って東より登り來るを見たり此使者かの地と海を傷ふことを許されたる四人の使者に向て大聲に叫び、我儕の神の僕の額に我儕が印するまで地をも海をも樹をも傷ふ可らずと曰り、われ印せられたる者の數を聞しにイスラエルの諸の支派のうち印せられたる者合せて十四萬四千あり。この「東より」は改正譯は「日出る處」と譯してある。之は日本を指す個有名詞である。又十四萬四千とは聖書數理學上、組織的完全數を現はすものでユダヤ人の完全なる國民的恢復を言ふ。又四人の天使とは、アンドロサクソン、ラテン、スラブ、チユイトンの四大民族を指すもので露、獨、英、米



佛、伊の強國のことである。彼等南北に分れて相争ひ世界の平和を攪亂するのであるが日出る處より起る民族が之を抑へる。其の場所はアジア、アフリカ、ヨーロッパの三大陸を結んだユーフラテス河の畔、今のバグダットの附近である。

### (六) 基督再臨と世界の恒久平和

日出る處の民族が起ち上ることに因て第一にユダヤ人が救はれ、次で世界の平和を招來するのである。聖書から見て日本に斯る重大使命のあることを眞先に基督信者が知つて、我等の愛する同胞に警告すべきである。さうでないとならば唯お國自慢に止り、世界に對して如何なる使命のあるかを辨へず、たゞ漫然と、日本が世界を平定するのだ、日本皇帝が全世界を支配するのだなどと言ひ出して來る。さうなつて來ると松澤病院ものだ。

ユダヤ建國と共に來るべき平和の時代にも國と國、民族と民族、各國政府があつて

も決して差支へない。キリストは再臨し給ふて君の君、主の主となり、全世界に平和を來らしめ給ふのである。其時こそ我日本も安泰である。さればキリスト様に来て戴くのでなければ、人間の手で規約や條文によつてやつても駄目である。況んや赤化運動者の如く上の者をブツ倒して階級をなくしても駄目である。又右傾の者の如く、あの總理大臣、この大官と片端しからピストルを向けたとて世界の平和が來るものではない。それよりも一日も早く平和の君なるキリスト様に来て戴くことだ。それがために少數ではあるがホーリネスの群を起し、日夜「主イエスよ來り給へ」と祈り、又我國に神が定めて居給ふ日出る國の大使命を遂行し得るやうに祈つてゐる。單なる設備や組織の改善によつて世界は平和になるものではない。我等は世界の根本問題の解決に當つてゐるのである。

近頃『宗教往來』といふ雑誌を手にして讀んだ事であるが、目下我國の基督敎界は行詰り、どうして良いか解らぬ状態にある。されば思切つて救世軍の如く社會事業に



没頭するか、中田重治一派の如く盲滅法突進するか、二つに一つであると書いてあつたが、我等は誰が何と言はうが、又どんな事が起らうが基督が再臨し給ふのでなければ納りがつかぬと心得て居る。されば「主イエスよ來り給へ」と祈り續けるのである。私は今より三十六年前に何とかして社會の根本樹に直して貢獻し度いと志を抱いて社會學でも研究せんとて渡米したのであるが、該地に於て基督再臨の光を與へられてから全く未來觀も社會觀も一變し長年の問題が解決してそれ以後どんな事件が起つても最早焦慮しなくなつた。人爲によつて決して世の中は良くなるものでなく、基督再臨によつて瞬間的に又根本的に改められるといふことが解つた。

(七) 大本の石柱の神に還れ

神が此國を今日に至る迄二千五百有餘年の間護り育て給ふたのは、大使命を與へて今後の事件に當らせんとして居給ふことを知つたので「聖書より見たる日本」といふ

本を著して、政治家にも、學者、軍人、思想問題に悩んでゐる人々にも、基督再臨によつて一切の解決がつくのであるから、祈らうではないかと勸めて居るのである。

神は目醒める人があらうがあるまいが豫定の計畫をドシ／＼進めて居給ふ。聖書にはユダヤ人の救の爲に「一見、彼等に他人の如く見える一民族を起して之に備へると書いてあるが、それが此の大和民族である。この事に就いて目醒めて居るものは尠い。せめて日本に居る三十萬人の基督信者でも、神が日出る國に與へし大使命が解つて呉れるならば有難いことであるが、彼等の大多數は解つてゐない。否、それ許りではなく基督再臨をさへセセラ笑つて居る連中である。

併し眞に國の將來を憂へ、此民族の救に苦心し、且何か此民族に使命があるに相違ないと感じてゐる人々が、斯る話を聞くと、然り、神は此民族を導いて世界に對して大使命を成せんとして居給ふとの、神の攝理を知つて、神を知らざりし人々の間にも覺醒が起りつゝある秋である。



(八) 義は國を高うし、罪は民を辱しむ

然らば我國民が神より與へられし使命を全うするには如何になすべきか。それは從來の不信仰を全く悔改めて、神を信じ、神に對して祈禱するものとなれ。

國のため人民のため神に祈るものとなれ。人を動かす事よりも神を動かし奉ることとは如何に重大なことであるか。此國難に當つて神に祈るものを我等は切望する。縦へ全世界が我國に反對しても、神若し我等の味方ならば誰か我等に敵せんや。此際我等は他國の反對等を懼れず、國際聯盟の代りに神に對してはガツシリと聯盟を結ぶ可きである。

最後に更に聲を大にして言ふ聖書の中には「義は國を高うし、罪は民を辱しむ」と書かれてあるが、國を滅すものは外敵にあらずして、國民の罪である。されば一切の罪より全く離れ、義しく潔く少しの暗き處なく時を過すならば、神は必らずこの國民を用ゐて最大使命を果さしめ給ふであらう。



## 偶像亡國論

「ルステラに一人の足弱もの坐しむたり彼は生來の跛者にて未だ歩行しことなし。此人パウロの語るを聽をりしがパウロ目を注て其愈さるべき信仰あるを視、大聲に曰けるは爾の足にて正しく立よ彼踊上りて行めり。人々パウロの爲し事を見て聲を揚ルカオニヤの方言にて曰けるは諸神人の形になりて我儕に臨れり。彼等バルナバをゼウスと稱パウロは専ら説話をする人なるが故にヘルメスと之を稱。時に其邑の前にある所のゼウスの祭司犢と花箍を門に携來りて衆の人と共に犠牲を献げ彼等を祭んとせり。使徒バルナバ、パウロ之を聞て己が衣を裂はしり出て大衆の中に入、喊叫云けるは人々よ何故に此事を行や我儕も亦なんちらと同情をもつ所の人なり爾曹に福音を傳るは爾曹をして此虚妄をすて天と地と海および其中の萬物を造り給



へる活神に歸しめんが爲なり。往にし世には神すべての異邦人に其己が道を行ひこ  
とを容し給しかど、また爾曹を恵て天より雨を降せ豊穰なる時候をあたへ糧食と喜  
樂をもて爾曹の心を満しめ己みづから證せざりし事なし。此言を以て苦辛じて衆の  
人の己等に犠牲を献んとするを止めたり」

(使徒行傳十四章八節—十八節)

(一) 基督教は初より絶對的宗教也

一昨年来米國より東洋の宗教を視察に來た宗教團體があつた。段々と調べた結果、先  
年彼の英國からリットン卿が支那及び滿洲國を調査していつた如くに彼等も歸國後之  
を報告して曰く「日本、支那、印度等の東洋諸國に基督教を傳へるには、何處に於て  
も其土地の宗教と妥協し、決して他宗教を攻撃してはならぬ。寧ろ宜しく他宗教と休  
戰條約を結ぶべきである」と發表した。

彼等としては之を餘程進歩した事を言つた積りである。而して佛教其他の宗教と提  
携して彼等の成さんとする事は、社會改良や文化運動が主なる目的であつて、基督  
教のみを以て唯一の宗教の如く思ふのは時代遅れの如く言つて世人の歡心を買はんと  
したのである。何んと笑ふべき事ではないか。そんな事の爲ならば基督教を日本に傳  
へる必要は更にあるまい。我等は古のキリストの御弟子の如く誰が何と言はうが偶  
像より離れて唯一柱の活ける眞の神に歸れと叫ぶ者である。



## (二) 國を愛するが故の苦言

私は此の日本に神が大いなる使命を與へて居給ふ事を力説して來た。之を想ふ時どうしても日本國民に苦言を呈せずには居られぬ。前述の米國宗教視察團の如き體裁の良い事を言つては居られぬ。どうしても我國に與へられし重大使命を遂行する爲には從來の儘では不可ない。

今迄は偶像に事へて居ても神は之を見過しなかつたのであらうが、今となつては一切の罪を悔改めて、すべての偶像より離れ、活ける眞の神に事へて我國に與へられし大使命を遂行せねばならぬと叫ぶものである。斯く私が申すのは此國を愛するからである。

パウロも思ひ切つて言つた。この時人々は彼の辯舌を聞き又生來の跛者が立上つて歩み出したのを見て、我等の平素拜んで居る諸神が形狀を以つて現れたのであるとパウロとバルナバを祭り上げ、神官が花輪と贖とを持つて來て、多くの人々と共に拜まんとした。大概の者ならばかゝる場合にオホ、ンと納り返つて顎でも撫でる處であらうが、パウロは不可ない、我等を拜んではならぬ。拜むならば活る眞の唯一柱の神を拜むべき事を告げて彼等を制した。そして爾曹に向つて福音を傳へに來たのは斯るつまらぬ事を止めて貰ひ度いからであると告げた。

人々から褒められる時又は煽てられる時我等にとつては最も危険なのである。併しパウロは人々の機嫌を害しても人々に我等を神として拜むべきでないことを警告したのである、實際之は仲々普通人には出來ない事である。



(三) 英雄崇拜心の履違ひ

かつてどういふ譯であつたか彼の乃木大將御存命の頃私は屢々中央線(省線電車)で將軍と一緒にゐた。そして、あの混雑の中でよく將軍は軍服姿の儘で老人や婦人子供に御自分の席をお譲りになり、御自身はつり革に掴つて居られたのを御見受けした。私は其態度を見て、流石は人格者だと感心せずには居られなかつた。大將は日本に於ては實に大切な御方であり、また人格者としても實に立派な御方であつた。私共は今でも大將に敬服して居る。

併し乍ら、いま假に、あの謙讓の徳に満ちて居られた大將がもしも生きて在らつしやつたとして、此の御方を神として祭り上げて拜んだならば果して大將はそれを喜んで御受けになつたであらうか。それと同じ様に日本に於て功勞ありし偉人を若し神として祭つたならば果してその人々はそれを喜ぶであらうか。之は大いに考へねばならぬ事である。

人間には誰にも英雄崇拜の心がある。併しそれであるからとて英雄を英雄として崇めずに、神となして拜したならば果して彼等は喜ぶであらうか。敬も過れば不敬となる。若しもそれ等の方々が生きて居る中に生肴を供へたり、拍手を打つて拜んだりしたならば果して喜ぶであらうか。斯る事は敬意を拂ふ途を知らぬからである。又そこから偶像禮拜が起つて來ないだらうか。

人々は我等を目して英雄や祖先を尊敬しないかの如くに攻撃するが、我等は親を親とし、英雄は英雄として此世を去つても尊敬する。たゞ其尊敬の方法が異ふて居るのである。

然るに尊敬の方法を誤つては全世界に向つて大使命を帯びて立たんとしてゐる此の矢先であるから世界に向つて物が言へない、私は國を愛するが故にどうしても偶像より離れよと叫ぶ。之がために假令私の事を非國民呼はりするものがあつても私



は決して退かない。これは聖書の眞理であるからである。

或者は又何故に、それ程偶像のことを喧しく言ふかと不思議がつて居るものもあるが偶像に事へることは我國の爲にならぬからである。

曾てユダヤ國民が唯一の神に事へて居た時に國は外敵より護られて安全であつたが其後偶像邪神に事へた結果國は崩潰した。即ち「我エホバ汝の神は嫉む神なり」と仰せ給ひし神より離れ、偶像に事へた時民族全體に不幸は及んだのである。此のユダヤ國民の歴史は又我民族に對する戒の鑒である。

されば我等はこの大和民族に言ふ。一切の偶像より離れ、大本の唯一の活る神に歸れと。そは我國を愛すればこそ斯く叫ぶのである。然らば偶像より離れることは困難な事であるか。否、何も六ヶ敷いことではない。

#### (四) 忠義心の履違ひ

一例を挙げれば、明治御維新の前には天子様はあれども無きが如き有様で、天下は三百大名によつてほしいまゝに權政を壟斷されて居た。その當時人々は忠義と言へば大名に對して盡すもののみ思つて居つた。

最近歸朝した尾崎行雄氏もその著書の中に曰く、「忠臣義士の亀鑑として今なほ尊敬せられて居る赤穂浪士が、若しも己が城主よりも更に尊ぶべきお方が京都に押込められて居ることを知つたならば必ずや天子のために生命を捐てたであらうが、彼等には唯己が城主の外何も見えなかつたので帝室式微の京都に居りながら、その挽回のためは何等の働きをもなさなかつた」と言はれて居るが、之は忠義に關する認識不足の故である。然るに御維新となつては藩は廢せられ王政は復古して忠義といへば一天萬乗の君に事へる事となつた。



私は津輕の國に士族の端ツクレとして生れた。私は今でも舊藩主の津輕伯爵に逢へばお辭儀はする。併し生命を捐やうとは思はない。それがために『お前は不忠者だ、お前の先祖は大變厄介になつたではないか、それであるのにお前は藩主の爲に生命を捐てぬとは以の外だ』と言ふ人があつたならば、それは言ふ方が余程どうかして居る。御維新前はそれでよかつたが、今となつては唯御一人の天子様にのみ忠義を盡す可きである。

宗教に於ても同様なことが謂へる。今迄は諸神に事へ、偶像を拜して來ても、神は之を不問に附し給ふたが、最早この儘では行かぬ。聖書に在る通り虚妄を捨て、唯一柱の大本の神に還らねばならぬと叫ぶのである。之がために私を不忠者だと言ふ者には言はせて置く。そんな事は覺悟の前である。要は、吾が愛する同胞が偶像禮拜の迷夢より醒めて唯一柱の活ける眞の神に還り、神が我國に與へ給ひし此大使命に目醒めればそれで足りるのである。

私は此意味に於て我國の宗教革命を叫ぶものである。即ち明治御維新によつて王政復古、政權は天皇に奉還せられし如く、今は我國宗教界の王政復古の時、様々の虚妄を離れ大本の唯一柱の神に還るべき秋である。

私は何故に斯く喧しく偶像のことを申すかと云ふに、それは唯一個人の安心や救に關することのみでなく、此事は實に我國民全体の救ひに關する事であるからである。我國に重大使命が與へられて居ることは既に説いて來た處であるが、之を全うするにはどうしても偶像に事へて居ては出來るものではない。一人の人が偶像に事へた爲に地獄に落ちて行くことも問題には相違ないが、此處では國民全体がどうしても果さねばならぬ重大使命を遂行する爲にこの事を力説して居るのである。

### (五) 所謂基督教國の偶像服事

私は斯く偶像から離れるやうに言ふのは何も西洋各國のやうになれといふ意味で



はない。或人は日本が西洋各國と交際するにはどうしても基督教を信ぜねばならぬと言つて居るものもあるが、私はそうではない。實は西洋に對しても癢に觸つて居るのである。

私が曾て米國に行つて一友人に逢つた時にお前は日本から何か偶像を持つて來たかと尋ねられたので私は答へて『否、そんなものは持つて來ぬ』と言ふと、其人曰く『米國から東洋に傳道に行つた宣教師達は歸には大概色々な偶像を持つて來て教會に於て聽衆に示し、東洋では眞の神を知らずして斯る偶像を拜んで居る實に氣毒な人達である。故に我等は彼等に基督の福音を傳へるためにどうしても力を盡さねばならぬ』と宣べて献金を集める材料に用ゐて居る。其處で私は彼に『若しも偶像を見なければ、何も態々東洋から持つて來なくとも、貴國にある天主教會に行つて見よ、澤山の偶像を見受けるであらう』と言つてやつた。

彼等は基督の像ならば偶像でないと思ひ、東洋にある千手觀音や其他様々の像のみ偶像だと思つて居る。だから血みどろになつた基督の畫像に手を合せ、マリヤの像に接吻して居る。丁度昔淺草に賓頭盧といふ偶像があつて、今は金網が張つてあつて近づけないが、その頃は日に何千、何萬といふ人が之に參りに行き、目の悪い者は自分の唾をつけた手で賓頭盧の目に觸り、それから自分の眼につけると治るといひ、又膝や足の悪いものは賓頭盧の膝や足に觸つてから自分の痛む個所につけると治ると言つてやつて居つた。賓頭盧も余りに人々から觸られるからツル／＼になつて、その結果この名が起つたのではないかと思はれる程であつた。

同じやうな事を西洋では昔からやつてゐる。伊太利ではベテロの像に何百年も前から接吻して來たために、遂にその拇指がなくなつてしまつた。又マリヤの像にも同じことをやつて居る。何と穢い、馬鹿氣た事ではないか。彼等は基督の像ならば偶像でないと思ひ、之に手を合せ、蠟燭をとぼして冥福を祈つて居る。之立派な偶像に非ずして何ぞ、されば偶像國とは彼等の言ふ如く東洋のみでなくして西洋諸國にはまだま



だ多いのである。併しそんな話を此處では長々と述べて居られない。

### (六) 徹底せるヒゼキヤ王の宗教改革

併し私は偶像を拜むことに對して一種の同情を持つて居る。人間は靈ばかりではなく肉体を持つて居るのであるから、何か目に見える像を造り、之を拜み、之に祈願を捧げる方が應へられる様に思ひ、何にも祈願の對象が無いと物足りなく感ずるものである。

されどキリスト様は『神は靈なれば拜する者も靈と眞を以て之を拜すべき也』(ヨハネ傳四章廿四節)と仰せ給ふた。之は低級なる宗教心を持つて居るものには解せられないことである。何か見ゆるものとして信仰の對象を現さんがために人間の頭から割出して色々なものを造るのである。

之には或る程度迄同情する。併しよし動機がさうであつても偶像を拜する民族は智的にも宗教的にも道德的にも進歩しなくなる。世界に於て偶像を拜んで居る國は非道い墮落を來しつゝあるではないか。殊に、神は何處にも在し給ふことを忘れて一ヶ所に祭り上げる處から甚だしく不道德となり、偶像の在る處必ず姦淫が行はれるやうになるのである。

いま聖書の中の歴史書を見るならばユダの王ヒゼキヤは『崇邸を除き偶像を毀ちアシラ像を砍たふしモーセの造りし銅の蛇を打碎けりこの時までイスラエルの子孫その蛇にむかひて香を焚たればなり人々これをネホシタン(銅物)と稱なせり』(列王紀略下十八章四節)と書かれてある。之は偶像問題に就て考へるには洵に興味ある記事である。

ヒゼキヤ王は神の命により國內の偶像といふ偶像を悉く取拂つて終つた。果はモーセの造りし銅の蛇をさへ打碎いたのである。偶像は人物崇拜の結果之を神として祭ること不可ないが、記念物に禮拜を捧げることも不可ない。



銅の蛇はユダヤ國民に採つては一種の國寶であつた。曾てイスラエルの民がアラビヤの野に於て神に逆つた結果、火の蛇に惱まされて民の中の多くの者は死んだ。その時モーセは神に祈りて民の罪の赦しを乞ひ、神の示に従つて銅の蛇を造つた。而して之を杆の上に載せて民に布告して曰く「すべて之を仰ぎ觀なば生べし」と極々簡單な方法を示して其場合の恐しい苦患より民を救つたのである。

後に主イエスは之を御自身に引照して『モーセ野に蛇を擧し如く人の子も擧らるべし』(約翰傳三章十四節)と仰せ給ふた。即ち自ら銅の蛇となつて、全人類の罪の身代りとなり、基督を仰ぎ望むだけで、言ひ換れば信するだけで誰でも救はるゝ途を開き給ふたのである。

されば銅の蛇はイスラエル民族にとりてはなくてはならぬものとなり、アラビヤの野からパレスチナまで携へて來て後千年もの間之を尊重して來たのである。而して尊重する處から之を國寶として置けばよかつたのであるが、何時の間にか之に香を焚き手を合せて拜むやうになつたのである。斯くの如く記念物や木や金で出來た像を拜むことを私は器物禮拜といふ。

茲に之に類した面白い話がある。アフリカ土人の間に働いて居た或る一人の宣教師が或時一部落で虎列刺が流行つたのを知つて藥を持つて行つてやつた。數年の後彼は同じ部落を通つて見た處が大變なお祭り騒ぎをやつて居るので何事かと思ひ、尋ねて見ると、一つの藥壘を祭る祭典であつた。然もその藥壘とは彼が曾つて與へた處のものであつた。土人等はその壘の藥によつてコレラ病から助かつたので之を尊い物として拜むやうになつたのである。之には宣教師も呆れて物が言へなかつたといふ。

此の銅の蛇もイスラエルに採つては忘れることの出來ない記念物であつたが彼等が唯獨りの神に向ふ信仰がいつとはなしに薄らぐに隨つて、此の蛇の像に向つて香を焚き手を合せて拜むやうになつたのである。

しかしヒゼキヤ王の時に至り唯獨りの神のみ拜すべきことを示され、而も此の神



に向ふ信仰を阻害するものならば、たとへ國寶であらうが何であらうが之を破壊してかゝつたのである。同じ様に我等の中にも是だけは棄てられぬといふものがあるか、而してそれが神に向ふ信仰を礙げてゐるか、我等はヒゼキヤ王の如くに之を打碎いてかゝるべきである。

(七) 基督の十字架信仰か、十字架に釘りし基督信仰か

イエス様は我等の罪のために十字架に釘つて下さつた。實に有難いことである。併し我等はキリストの十字架を拜むものではない。十字架に釘つて下さつたキリストを拜むのである。キリストの十字架には人を罪より救ふ力は少しもない。併し十字架に釘り給ひしキリスト様が人を罪より救ふのである。こゝを取違へては不可ない。

然るに偶像化した天主教ではキリストの十字架を拜んで居る。而も屋根の一番高い所に置いてあるが、余りに高過ぎて折角の十字架も罪人には手が届かないではないか

又、十字架の前に蠟燭を點し、抹香を焚いたりして拜んで居るが、そんなことをして何になる。ヒゼキヤ王が生きて居たならば笑はれるであらう。

西洋でもクロムエル時代のピューリタン徒は十字架を片ツ端からブチ壊し、基督のためには、生命を賭けて信仰した。遂に英國では余りに迫害が酷いので、アメリカに渡つてその信仰を完ふしたのである。今の進取的なアメリカ精神は彼等の血統を引いたのである。我等も一切の偶像を拜まぬ。キリスト教の偶像てさへ拜まぬのであるから、**況んやそれ以外の偶像をや。**

我國で今拜まれて居る諸神の中には随分怪し氣なものがある。大きな穴の在るものを拜んだり、又は石の突立つて居るものを拜んだりなど。實際その神体を見るならば親兄弟の前でも口にし得ないやうなものを平氣で拜んで居るのである。人の前でも言ひ得ないやうな生殖器などを祭つて拜むとは何たる事か。

甚だしいものは徴兵忌避の神だの、縁切り稻荷だのといふのがある。先日横濱に行



つた時、三景園に寄つて見た。妙に薄暗い處があるので、何事かと思つて覗いて見ると格子に紙摺が澤山に下つて居るので、其の中の一つを取つて開いて見た。然るにあの女を、あの男をと、馬鹿氣切つた事が書かれてあつた。何といふ馬鹿氣切つた事か之は縁結びの神と言ふとの事である。

(八) 容光をめて飽足ることをえん

我等はこの國を愛する。されば此大和民族に一切の偶像から離れよと叫ぶ。偶像禮拜は此の國の詛である。私は偶像亡國論者である。どうしても我民族に凡ての偶像より離れよと叫ぶ。

神は靈なれば拜する者もまた靈と眞を以て之を拜すべきである。されど我等は何時迄もこの状態を續けるのであらうか。否、さうではない。懸て眼前に神を見奉る時が来る。私とても眼前に神を見たい願ひで一杯である。今こそ我等は靈の眼を開いて

神を見て居るが、もう直に此肉眼を以て神を見奉ることが出来ると思つて居る。

私が偶像信者に同情し得るのは此點である。眼前に神を見たい、肉眼を以つて神を見たいといふ心には同情出来る。キリスト御自身一度肉体を攝つて此世に現はれ給ふた。而して今一度現はれ給ふ。あゝ懸て其時我等は愛する主イエスに眼前お目にか

かることが出来る。何と幸な望みてはないか。然るにそれ迄待たれないで、自分達の手で種々様々の偶像を拵へて拜むやうになると詛にこそなれ祝福とはならぬのである。

主イエスはもう間近い中にお出でなさる。我等は若しこのイエス様にお逢ひしたければ、今の中に一切の偶像より離れ、罪から離れて心の潔き人となつて居なければならぬ。聖書に『心の清き者は福なり其人は神を見ることが得べければ也』(マタイ傳五章八節)と記されてあるが、之は單に心靈的に神を見ることが言つた許りではなく、有形的に神を見ることが出来る事を言つたのである。その時こそ眞に我等の拜すべき



御方、長らく我等の待つて居つた救主の聖顔を見、容光をもて飽足ることが出来るのである。

されば今神にもあらぬものを拜んで居たならば之から離れ、我等の一切の罪の身代りとなつて下さつたイエスキリストを信じて眞の神に事へねばならぬ。私の言つて居るのは新しい神ではなく、我等の祖先が拜んで來た大本の唯一柱の神に還れといふのである。呼んでも叫んでも答へないやうな偶像にてはなく、呼べば答へて下さる活る神に還れといふのである。

嗚呼今こそ我國民が宗教的に大覺醒をなすべき秋である。繰返して言ふ。偶像より離れ、活る眞の唯一柱の神に還れと。

## 東方の博士

「夫イエスはヘロデ王の時ユダヤのベテレヘムに生れ給しが其とき博士たち東方よりエルサレムに來り、曰けるはユダヤの王として生れ給る者は何處に在す乎われら東方の方にて其星を見れば彼を拜せん爲に來れり。ヘロデ王これを聞て痛む又エルサレムの民もみな然り。凡の祭司の長と民の學者とを集てヘロデ問けるはキリストの生るべき處は何所なる乎、答けるはユダヤのベテレヘムなり蓋預言者の録されたる言に、ユダヤの地ベテレヘムよ爾はユダヤの郡中にて至小きものに非ず我イスラエルの民を牧ふべき君その中より出んと言はなり。是に於てヘロデ密に博士等を召星の現れし時を詳に問て、彼等をベテレヘムに遣さんとして曰けるは往て嬰兒の事を細に尋これに遇ば我に告よ我も亦ゆきて拜すべし。かれら王の命を聞て往り前に



東の方にて見たりし星かれらに先ちて嬰兒の居所にいたり其上に止りぬ・彼等この星を見て甚く喜び、既に室に入れれば嬰兒の其母マリアと偕に居を見ひれふして嬰兒を拜し寶の函を開て黄金、乳香、没薬など禮物を献たり。博士夢にへロデへ返る勿との默示を蒙りて他の途より其國に歸れり」(マタイ傳二章一節—十二節)

### (一) 學究的に宗教を取り入れる

茲はイエス様が此世にお生れになつた時、東の國より博士達がイエス様をば拜せんとて遙々ユダヤの國へ來た時の記事である。

此處の「東」といふ語は聖書には其處此處に多く記されてあるが、原語の希臘語ではアナトリーといふ語であつて「日出る處」といふ意味である。之は私が勝手に解釋するのではなく、原語に「日出る處」とあるから言ふのである。即ち日出る處より博士達が御降誕の主イエスを拜せんとて來たのである。併し私は茲の日出る處を直

ちに日本であるとは申さない。何となれば其當時日本はどんな國であつたかは未だユダヤの國には知られてなかつたであらうから。

されば茲の日出る處とはアラビヤか、今のバグダット或は遠くともベルシヤ邊を指して言つたのであらう。併し兎に角日出る處の博士達はイエス様を拜せんとて來たのである。而して之を模型的に視、或は心靈的に考へ、或は又宗教的に何かの暗示を與へてゐるのではないかと調べて行くならば非常に興味深いのである。

又何故か茲には博士と譯されてあるが博士といへば余程學問のある人々のやうに思はれるが、原語はマヂ Magi で、英語の Magician 日本の魔術、呪ひなどの意味である。英語の聖書には Wise-men (賢人) と譯されてあるがそんな意味であらう。

また或學者は之をベルシヤの星學者即ち今の天文學者であらうと言つてゐる。彼等が空を調べて居た時特別な星を發見し非常に興味を惹いた。彼等は天文學の知識からして天界の異象に氣附いた許りではなく、西の方に偉大なる人物が出現した事を知つ



たのである。それはその當時のユダヤ人達は舊約聖書の預言に隨ひ、世界を統御し給ふ平和の君なるメシヤの來ることを信じて俟つて居り、又これを彼等が散らさるゝと共に世界のあちこちに傳へて居たからである。

そこで彼の星學者達は西の方に出た不思議な星とユダヤ人の俟つてゐるメシヤ出現の説とを結び附けて、之は必ず全世界を統べ治め給ふメシヤが出現したのに相違ないと星に導かれて東方を立ち出で遂にエルサレム迄來たのである。

然らば歴史の上からかゝる星の出現が、星學上の記録にあるかどうか私には知らぬが、何せ救主なるメシヤが此地上に現れたのであるから何か特別な異象が天に現れたのであらう。聖書にはその時には天に於ても、地に於ても休徴が現れると記されてある。

神も亦、平和の君なるメシヤの降誕を心底から俟つてゐる人々に示さんために星を以つて告げ知らせたのであらう。されば東方の博士が遙々エルサレムに來たのは天文

學上の智識から導かれたといふよりは宗教的な暗示によつてなされたものと見るべきである。學者の中にもかういふ工合に天の異象から救主を捜し當る人が起るならば何と幸な事ではないか。

## (二) 仕甲斐のある學問

或人は言つた、天文學者にして若し天地の創造主なる唯獨りの神を知らぬならば氣が狂つて了ふと。彼等が空の星の驚く可き態を調べて居る時、是は當り前だ、自然的だなどと言つて居られず、又事實現存するのであるから空想的だと否定し去る譯にも行かず、余りに其結構の偉大さと巧妙不可思議なるのために、唯不思議だ〜と言ふの外なく、それに引き較べて人間の微小、孱弱なるを知つて遂に氣が狂つて了ふのである。

之に引換へ神を知り聖書を信じて居るものは「もろくの天は神の榮光をあらはし



穹蒼はその手のわざをしめす』とて調べれば調べる程、愈々全智全能なる神の成し給ふ聖工を知つて、神を崇め、讚美せずには居られなくなる。斯る人は眞に神を知れる天文學者である。

聖書には『世人は己の智慧を恃て神を知ず』と書かれてあるが、物事を調べて第一原因を突き止めるのでなければ、遂には解らなくなつて了ふ。多くの學者は大抵この神を突き止めに終つて了ふ。

その當時日出る處はベルシャであつたか、印度であつたかは知らぬが、兎に角東方の博士達は、不思議なる星の出現を知り、之は偉大なる人物が現れたのに相違ないと尋ねて遂に救主を捜し當たのである。

私は言ふ、今の學者ももつと徹底した頭を以つて凡ての事をやつて欲しい。哲學者も科學者も物事を研究するのはよいがその結果第一原因が何であるかを悟つて戴き度い。此世の有様に對してもさうである。世の中は變りに變つて行くが、何とかなる

であらうでは不可ない。もつと根本に溯つて最大原因を突き止めて戴き度い。

私の知つて居る一人の社會學者は言つて居る。『日本の基督信者は基督が再臨すると言つて居るが、さういふ事でもなければ、此の世の中は納りが着かない。遂には何處迄落ち行くか知れぬ』と。彼は未信者であるが、基督再臨するのでなければ此の世の中は收拾出来ないことを知つて居る。學問も其處迄行けば洵に幸である。

どんな學問をしても、その中から宇宙を創造し且之を動かして居給ふ神を認め、又神が遣して全世界を統御めしめ給ふ救主が懸て現はれることを知ることを得るならば學問も仕甲斐があるが、大抵の者は其處まで行かぬ中に終つて了ふ。

また私は一人の理學者に逢つた。彼は醫學博士の稱號を持つた立派な醫者である彼は私に『貴方は藥は召上りませんか』と尋ねた。そこで私は自分の信仰を發表して『私は病氣になつても藥を用ゐぬ。決して醫者や藥物に頼らない。勿論醫者や藥によつても病氣は治るかも知れぬが、私は醫者よりも偉いお方を信じて居るから



そのお方が一切の病氣を癒して下さると確く信じて居る。私は信仰生涯に入つてから過去三十数年の間色々な難病にも罹つたが、唯活る神にのみ依頼んで薬一服飲まずに癒されて来た。今はこの通り元氣であります」と證詞した處彼は大變に驚いて居たが、やがて彼曰く「左様でせう。私は何う云ふ譯であるか知らぬが宗教界には一種云ふ事の出来ぬ不思議な力のあることを認めて居ります」と言つた。彼は自らは醫術に達した人であるが宗教界に於ける不思議なる醫術の能力に想ひ及んで居ることは幸なことである。併し彼の東方の博士達の如く學問した結果救主を尋ね當たつたならば更に／＼幸ではないか。

### (三) 時の休徴を別ち能はざる乎

基督初降臨の頃東方の博士達は救主を拜せんとてエルサレムに行つた。何故に私は之を言ふか。嗚呼、この事は頗る暗示に富んで居るからである。

私は東方の博士をば直ちに日本から行つた博士達だとは言はぬ。併し日出る處に起つた學者達が遂にキリスト様に尋ね逢つて、大いなる満足を得て歸國したといふことは實に教訓深いことであると謂はざるを得ぬ。

而して其學者達とは星の學問をする人々であつた。私は今イエス様が御在世當時に言はれた聖言を聯想せざるを得ぬ。

「パリサイとサドカイの人きたりてイエスを試んとて天の休徴を我儕に見せよと曰ければ、彼等に答けるは爾曹暮には夕紅に由て晴ならんと言、晨には朝紅また曇に由て今日は雨ならんといふ僞善者よ空の景色を別ことを知て時の休徴を別ち能はざる乎。姦惡なる世は休徴を求るとも預言者ヨナの休徴のほか休徴を予られじ遂に彼等を離れて去ぬ」(マタイ傳十六章一節—四節)

イエス様は偉いことを仰有つた。汝等は空に關し、天候に關する智識を持つて居るその智識は嘘ではない。斯く汝等は晴雨を判別し得るに拘らず、何故に時代の休徴を



見分けることが出来ぬかと詰責し給ふたのである。嚴かな聲ではないか。

我等も我國の軍人、學者、政治家、または國の將來を憂へて居る愛國者達に、此時代が解らぬかと叫ばざるを得ない。

私共には學問はない。天文學者や漁夫や百姓のやうに天候を見分けることも出来ぬ。併し口幅つたい事を言ふやうであるが、今の時代はどんな時であるか幾分か神により知らせられて居る。それ故己が身柄をも辨へず我が愛する同胞に呼かけて居るのである。

此の世は一体どうなる？ 一か八かどうにかなるだらうと云ふやうな漠としたことではない。私共は此の時代に就ても、又我が日本の將來に就ても神より啓示せられて居るので、世の智者、學者の前をも憚らず大膽に叫んで居るのである。

茲に注意すべきことは、千九百年前、日出る處から星を頼りに來た博士達が、遂に主イエスの處を捜し當た如くに、我等も聖書の光に由り、また時の休徴を知つてキリ

スト様が再び地上に來ることの近きを示されて居るので、どうしても之を我が愛する日出る國の同胞に警告せねばならぬと迫られて居る。

#### (四) 來るべき世界戦争と日東國の役割

今は如何なる時であるか？ 今は非常事だと社會一般の者も言つて居る。然らば此非常時は何時迄續くものかそれは人々には解らない。併し我等は何も偉さうな事を言ふ爲ではないが、嚴かな事を神に由つて啓示せられて居る。聖書の中には聽て我大和民族が大陸に向つて進出することが書かれてある。何處迄進出するのか、今は滿洲から蒙古の方に出でんとして居るが、やがて亞細亞大陸を横斷してペルシヤに迄出で、更にユーフラテス河畔のバクダットに迄行くといふ事が書かれてある。之は私の牽強ではない。私の聖書に記されてあるばかりではなく諸君の持つて居る聖書にも誰の持つて居るものにも書かれてある。



日本は唯東の端の島國に縮こまつてグズ／＼して居るのではない。東より出でて全世界に對して平和の福音を述べ傳へる責任がある。嘗にそれ許りではなく世界を相手に戦ふことをも聖書に記してある。

總てヨーロッパの人類は南北の二手に分れて彼のユーフラテス河を中心にして相戦ふことをも記してある。即ち舊約聖書ダニエル書十一章を見るならば歐羅巴各國は南北の聯合軍に分れ、北の聯合軍は破竹の勢を以つてエチプト迄進出して南の聯合軍を撃破する。その頃北軍の留守軍に内亂が起り、又日出る處の軍勢が來襲するとの噂を聞いて、慌てふためいて、エチプト迄遠征した北軍は再び引き返すといふこと迄聖書に書かれてある。

然らば之等は何時起るかといふに何年何月といふことは明言出來ぬが、近い中行はれるといふことだけは言ひ得る。最近の世界の動きは着々と之に向つて運ばれつつあるてはないか。而して其の時我國は如何なる役割を演ずるか、それは全世界に散ば

つて居るユダヤ人を援けて故國パレスチナに歸し、且彼等の建國を援助するため用ひられるのである。神はユダヤ建國の速かならんことを望んで居給ふが、その援助者を長い間ユダヤ人との間に確執して來た歐米人に需めずして我日本をして之に當らせんとして居給ふ。之は何と驚くべき預言ではないか。此の預言通り萬事は運ばれることを私は固く信じて疑はぬ。されば何とかして一刻も早く之を我が愛する同胞に知らせ度く願つてゐる。

先達て我ホーリネス教會に屬する一台灣人の福音使は私に向つて、斯る重大使命を帯びた日本人の一員とせられた事を甚だ光榮に思ふと言つた。又ロシア人にして我教會に屬してゐる一傳道者も私に語つて曰く「神の攝理によつて私はあの恐しい國情にあるロシアから曳き出され、日本人の妻を貰ひ、日本人に歸化した事を洵に嬉しく思ふ。それは唯日本人になつた事が嬉しいと言ふのではなく、神が此民を用ひてユダヤの建國を援けしめ、全世界の平和を招來する基督の再臨を祈らせて居る民の中



に加へられた事を喜ぶのである』といつた。

他國人でさへ、神が我大和民族に與へし使命を尊び、此の民の中に加へられた事を喜んで居るのに、どうして我々は之に無關心で居られやう。もつとく／＼醒めてかゝらねばならぬ。我々の中に果してそんな時が来るであらうかと懸念してゐるものがあるか。斯る人は主イエスより『偽善者よ空の景色を別ことを知て時の休徴を別ち能はざる乎』と詰責せられるであらう。

(五) 豊富なる末の世の休徴

私は基督再臨の近づけるを知り、末の世の種々の休徴を見せられて愈々身に緊張味を覚えて居る。

各國が尤大な豫算を計上して軍備を整へて居るのは『なんぢら戦と戦の風聲をさかん』といふ預言通り世の終りを豫告して居るのである。

またダニエル書十二章には『終末の時に衆多の者跋渉らん而して知識増べし』と書かれてあるが、之は基督のお出が近づくに隨ひ、人文人智が最高に達すると言ふことである。而して今は丁度その時に至つて居る。また交通が頻繁になると書かれてあるが今程に頻繁な時は何れの時代にも曾てあるまい。

『また不法みつるに因て多の人の愛情ひやくかに爲べし』とある如く不法の靈「Wickedness」が跋扈すること甚だしい。君を君とも思はず、親を親とも思はずに、勝手放題なことをやり、社會も、國家も、宗教も道徳もあつたものではない。左傾右傾の極端なる運動が急激に進展しつゝあり、人情は愈々冷やかになりつゝある。之實に末の時の休徴でなくて何であらう。世人には氣附かなくとも我等は基督再臨の近い休徴なることを知り大いに警戒させられて居る。

然るに何たる幸なことか、神は我等如き何の取り得のないものを選び、神の聖靈によりて我等の心の眼を啓き、此の暗黒の世に在つても潔き義しき世渡をさせて居給



ふ。我教會をホーリネス教會と呼ぶが、ホーリネスとは聖潔といふ意味である。ダニエル書には「衆多の者浄められ潔よくせられ試みられん然ど悪き者は悪き事を行はん悪き者は一人も曉ること無るべし然ど穎悟者は曉るべし」とある如く末の時の特徴の一つは聖潔運動の勃興である。この運動は今全世界に廣りつゝある。

さればホーリネス教會の出來たのも時の休徴の一つである。私の口から言ふのは可笑しいが、最近發行せられた文部省の宗教報告書の中に、日本の基督教會の中で一番進歩率の早いのはホーリネス教會であると記してある通り、イエスキリストの血によりて罪から全く救はれ、潔められて行くといふ運動は破竹の勢を以つて日本の隈々隅々迄行き進みつゝある。

之と反對に惡しき者は愈々惡に進みつゝある。私は當年とつて六十四歳で明治の初年に生れたものであるが、其頃の一般の風習は今よりはズツと善かつたやうに思はれる。その頃は酒を飲むといつても濁り酒ぐらひで酔つて居たものであるが、今では

やれウキスキード、ブランドード、ジందと青い酒や赤い酒など種々強烈なものを服用して居る。

又社會一般は極端な享樂主義に陥り、男女間の性道德は著しく紊亂して居る。随つて六百六號などの性病薬は頻りに賣られ、有田ドラツクなど大繁昌を來して居る。又自殺する者、心中する者は後を斷たず、強盜、殺人などの忌しき記事が日々新聞を賑はして居る。これ末の世の休徴でなくて何であらう。我等は之等のことを見聞して心を痛めると共に基督再臨の愈々間近くなつて來たことを知るのである。

六) 物の動きを見て基督再臨に醒めよ

或る者は此世は益々改善せられ物質文化が急激に進みつゝある如くに人間の正義人道、風俗習慣も向上するものゝ如くに考へて居るが、之は大いなる謬見であつて、急速度に墮落しつゝある事實を忘却して居るものである。



また或る者は奇妙な世の中になつたものだと言ふと漫然と世の動きを見て居るものもあるが、我等心靈的に眼の開かれた基督信者は、之等の物の動きを見て、暗き闇も暫しにして、義の太陽なる基督様が出現することに氣附いて居るのである。

然るに世の人は何アに基督が来るなんて嚇し言であつて、さうでも言はなければ信ずる者が起らないし、教會が繁昌しなくなるから言つて居るのだと申して居るが、決してそんな事はない。之は日本に於ける我々がやつて居るばかりではなく、全世界何處の國に於ても、キリストの血によつて罪から救はれ、聖書を神の言葉なりと信じて居る者は、心から基督の再臨を俟ち望んで居るのである。何時も同じ風が吹くと思つて居ては大變である。様々な時の休徴を見て再臨の時の迫つて居ることを知らねばならぬ。此の休徴は常に宗教界や道德界の心靈的方面ばかりではない。具体的な休徴が天界に現はれる事をも信じて居る。

過日新聞紙上に秩父の方に太陽が三つ出たといふ記事が掲げられてあり、又之に對

して色々な解説も載せられてあつて天文學上かゝることは有り得べき事の様にも言はれてあつたが、我等預言の光を以つて聖書を読んで居るものは、かゝる現象を見ても基督のお出の近くなつた休徴であると認めて居るのである。

また斯る觀察眼を以つて政治界をも、實業界をも、宗教界をも、天界をも、國際間の諸事件をも注意深く視る時、恰も基督初降臨の頃、東方の博士達が空に於ける異象をメシヤの出現と結び付けて考察した如くに、我等も天文、地文の異象をば、悉く預言の光に照し基督再臨と結び付けて考察すべきである。斯くすることは心靈的にも洵に幸なことである。

斯くして新聞、雜誌に現れて來る世界の動きを見て、愈々始つたか、聖書に記されてある通りだ、愈々日出る大和民族が重大使命を帯びて立つべき時が來たかと、眼光紙背に徹する熱心さを以つて、起り來る諸事件を觀察するならば何と幸なことではないか。



あゝ今こそ日出る處の我國民が、凡ての物の動きを基督再臨に歸納して、醒めて立つべき秋となつた。

(七) 三つの尊き献げ物

最後にどうしても申上げねばならぬ大切な事がある。それは彼の東方の博士達がイエス様を拜さんとして來た時に、寶の箱より三つの尊き禮物を取り出して捧げた記事である。之は頗る暗示に富んでゐる。

『嬰兒を拜し寶の盒を開て黄金、乳香、沒藥など禮物を献げたり』(十一節) 即ち、この黄金、乳香、沒藥は心靈的に深い意味を持つて居る。

日出る處にある我等、天にも地にも末の世の異象を見たならば、再臨の基督を迎ふるために、信者、未信者を問はず、どうしても此の三つの献げ物を準備して出ねばならぬことは本章の結論である。

然らば三つの献げ物とは何か

(A) 黄金 || 信仰

第一の黄金とは何か? 『われ爾に勸なんぢ富をなさんために我より火に燬たる金を買』、(黙示録三章十八節) とある如くに雜りなき金、即ち純粹の信仰のことである。肉の慾罪の念を混へない、純粹の信仰である。我等は財産や、地位があつても『信仰なくば神を悦ばすこと能はず』。只神に受け入れられるのは純粹無垢の信仰である。而して『是故に爾曹の大なる報を受べき信仰を投棄ること勿れ』。再臨の主の前に出るには活ける信仰を持つて行くの他はない。

(B) 乳香 || 祈禱

第二の乳香とは何か? 『香の烟聖徒の祈禱に添て天使の手より神の前に升れり』(黙示録八章四節) とある如く神の前に、馨しき香として立ち昇る聖徒等の祈禱である。



神の前に置かれてある金の香爐を満すべき聖徒等の禱告である。神は此の禱告を需めて居給ふ。國の將來を憂へ、國のために奉公盡忠する立派な方はある。併し神の需め給ふものは此國のため、愛する同胞のために、私心私慾から離れ、熱誠こめて神に祈る禱告者である。又全世界に平和を來らせるために、平和の君なる主イエスに速かに來り給へと祈る祈禱者である。「義き者の篤き祈禱は力ある者なり」。信仰の祈禱、聖靈に由れる祈禱は、全智全能の神の聖手を動かす。而して神は此の祈禱に應へて豊かに此の日本を顧み給ふ。されば斯く示された我等はどうしても祈らざるを得ぬ。この乳香とは祈禱の靈のことである。

(C) 没薬—殉教

第三の没薬とは何か？ 之は葬りの時に用ゆるもので、死人を腐らせないやうにする薬物である。而して黙示録第二章にはスムルナといふ教會が記されてあるが、この

スムルナとは没薬の意である。スムルナの教會は非常に迫害せられた殉教教會である。それ故没薬とは言ひ換れば、殉教することである。おゝ、此覺悟を以つて罪と世と惡魔に對抗して、戦つて行く精神は是沒薬である。神は之を需めて居給ふ。自己の名譽や満足のためではない。神の榮光のため、基督の再臨の速められるため、又神が此の大和民族に與へし重大使命を果し得るために、生命を懸けて祈る殉教者を需めて居給ふ。我等は之がために血を流して當らねばならぬ。

されば基督初降臨の際、東方の博士達は黄金、乳香、没薬の禮物を捧げて拜をなした如く、やがて全世界に王の王、君の君、主の主として來り給ふ基督を迎へんとする日東國の我等は、雜りなき信仰、熱烈なる禱告、殉教の精神の三つを整へて聖前に出でねばならぬ。願くは、もう暫時にして再臨し給ふ基督を迎へるために此の三つの禮物を献げる『東方の博士』が多く此の國より起らんことを切望して止まぬ。



## 日本國體論

「太初に道あり道は神と偕にあり道は即ち神なり。この道は太初に神と偕に在き。萬物これに由て造らる造れたる者に一として之に由らで造れしは無。之に生あり此生は人の光なり。光は暗に照り暗は之を曉らざりき。」

(ヨハネ傳一章一節十五節)

### (一) みづほのくに (瑞穂ノ國)

此の處を神學上から説明せんとせば仲々難しいことであるが、今私はそんな事を申し上げる積りではない。茲にある通り太初に道があり、道が神と偕にあつた。道即ち神である。この道によつて一切のものは造られ、之に生命があり、この生命は人の

光であると云ふのである。さうすると大變に込入つて聞えるがこの道とは私共の信じて居るイエスキリスト様の事である。イエス様は神より生れ出た御方で、言ひ換へれば神御自身である。而して今より千九百年前に神の生命を與ふる爲に肉體を攝り、イエスと云ふ一個の人物として此の世に現れ給ふた。それ故にイエス様は神の生命の化身であり、之はまた人の光となり、この光を受くると暗に住む者も暗を歩まずに濟む者と成る。

仍て、話を轉じて申上げるが、我日本に就いては嚮に拙著「聖書より見たる日本」にも書いた通り、日本が未だ國をなさぬ前から聖書の中には「日出る處」とて書き記されてある。之は原語の希伯來語では「ミヅラホ」といふ語で、我國でも自から瑞穂の國と呼んで居る。此の「ミヅラホ」と「ミヅホ」とは語呂に於ても意味に於ても頗る類似して居る。「ミヅラホ」は「日出る處」と譯されてあり、尙「起る」「昇る」「芽を出す」等の意味がある。日本語の「ミヅ」とは「瑞々しい」、「穂を出す」、「起上る」、



「發展する」などの意味があつて、新鮮なる生氣に満ちたことを意味して居る。

併し今は言の解釋ではない。今より二千七百年前に預言者イザヤに由つて「日出る處に於て神の榮光を畏るべし」と云はれて居る如くに、我等は地理的にも歴史的にも人種的にも考へて、總て神は此の民を用ひ、全世界に驚く可き事をなして、御自身の榮光を顯し給ふことを信じて居る。

されど凡て物には裏表のある如く、神は積極的には此の民族に大使命を與へて偉大なる事を成さしめ給ふのではあるが、消極的には今の儘で罪を有つて居ては成らぬとて全く罪を棄て、神に事へることを勧めて居給ふ。而して神が後楯となつて此の民族に遂行なさしめんとする偉大なることの一は全世界に散らばつて居るユダヤ人を救済する役目に當ることである。古來世界中の殆どの國家はあの二千五百年前に國を失つたユダヤ人を虐待通して來たのであるが、神は不思議にもユダヤ人を知らぬ、またユダヤ人も知らぬ此の日出る國を用ひてユダヤ建國に當らしめ、世界に永遠の平和を來

らしめ給ふのである。之は又主キリストの再臨と放つべからざる關係があり、やがて基督來りて全地を支配し給ふといふ實に驚くべき聖書の預言を成就するために此の瑞穂の國が用ひられるのである。

## (二) すめらみこと(皇尊)

次に茲で我國の國民思想に立入つて考へて見たい。此の國民は必ず宗教的にも大なることをなすであらう。されば何んとしても今の中に醒めてかゝらねばならぬ。國民一般は氣附いて居るかどうか知らぬが、我國には特別な言表はし方が神代時代からある。之は私一個の主張して居る意見ではなく、日本基督教會牧師尾島眞治氏も熱心に説かれて居ることであるが、日本では上に立つ高貴な方に對して『命』といふ尊稱を用ひる。例へば伊弉諾、伊弉冊ノ命、日本武ノ命など、この事に就いて人々はただ神道に用ひる言葉だと平氣で使つて居るが、否々、之は大に注意を要することであ



つて之によつて日本國體と國民思想の真相を採知することが出来る。

されば以下此の『命』に就いて檢べて行くのであるが、之を述べる前に極く簡単に日本の國體について申し上げ度い。さて國體とは何ぞやと申すと喧ましい問題になるが、國柄と申せば最も解り易いと思ふ。即ち人には人柄、着物には縞柄があるやうに我國體にも一の國柄がある。國柄を知らずにア、のカウのと言ふべきではない。我が國は國民歴史の進展に於て西洋各國とは全然趣を異にして居るものであつて、西洋諸國は科學の進展と共に進歩して來た科學文明の國であつて社會を制度、組織で固めて來た所謂屈詰めの國である。然るに日本は古より人格を以つて民を治めて來た國で、近頃の所謂皇道、王道を以つて治めて來た國體である。

我國では昔から上にあつて政治を掌り給ふ天子様をば「すめらみこと」(皇尊)と申して來た。下手な國學者のやうな事を申すが「すめる」とは治べる、治めることで、この御一位によつて國が治められて來たのである。今こそ日本は西洋諸國に倣つて憲

法を制定し、立憲君主政體であるが、昔は統べ治め給ふ御人格者に依つて國が治められたのである。この御方が家長また國首とならせられ其の下に國民は絶対服従を以つて奉公盡忠の醇風をなして來たのが我國の國柄である。

此の國風はまた聖書の教へる處と一致するものであつて聖書には『上に在て權を掌る者に凡て人々服ふべし』(ローマ書十三章一節)とあつて、此統べ治め給ふ御方には、何事でも御従ひ申すべきで、又其國內に居る外國人でも其國の主權者に従はねばならぬとは聖書の教へる處である。聖書には『柔和なる者にのみならず苛刻者にも服ふべし』と云はれてある。此事は我が日本に於ても同じであつて、僕たる者又臣民たる者は自分の都合から割出して服ふべきでなく、何が何でも従ふ可であつて、帝國憲法の冒頭に『天皇ハ神聖ニシテ犯スヘカラス』と記されてある通り、臣民たる者は此の御方に絶対に御従ひする事が我國建國以來の國是である。然るに西洋では主權者が國民の氣に喰はなければ何時でも取り換へるやうなことをする。世界何處を搜しても日本



の様な國柄がない。其事については聖書に明白に記されてある。聖書ぐらい我國體と合致したものはない。

然らば聖書は何故に上に在つて權を掌る者に服従することを要求するか、それは『蓋神より出ざる權なく凡そ有ところの權は神の立たまふ所なれば也』(ロマ書十三章一節)とある如く、神より出でざる權なく、又有る處の權は神が與へ給ふのであるから従ふのである。『帝王神權』といふ語があるが之こそ聖書より出た語である。

### (三) みことのみ(詔)

前にも述べた如く、我國體は西洋諸國と異り、統へ治め給ふ お方を敬ひ且つ全く服従して保たれて來た國であることを説いたが、このお方を『みこと』(命)と申上げたのは如何なる譯であらうか、それは『みこと』とは『みことのみ』(詔)または『みこと』(言)の意味であつて上よりの御言のことである。

我が國は御言の國で、上なる御方から御出し下すつた御言を遵奉して治められて來た國である。即ちその御言、即ち詔勅に従つて治められて來た國である。

而して『太初に道あり』(ヨハネ傳一章一節)の「ことば」に日本譯では「道」といふ字を用ゐて居るが、道とは「ことば」のことである。言は人格者の發露であつて、彼の汎神論者等の言ふが如く、神は何處にもあり、一切は神なりとは言はない。即ち道、或は法とは智情意を有する神から出で來る言のことで、人格を有する者である。單なる言ではなく、又一片の道理でもない。日本は元來この一人の御人格者によつて統へ治められて來た國で、このお方を『みこと』と仰ぎ尊んで來たのである。之は







ちその時は宗教的、哲學的の意味に於てのみならず、人々は主キリストの言に従つて行動するやうになる。我が日本に欲しいものは之である。

### (五) みこと(命)

さて尙話を進めて行く。日本では大昔上に在て權を有ち給ふたお方を「みこと」と呼んだことに就ては既に説き來つた處であるが、この和語に「命」といふ漢字を當て箴めて居る。どう言ふ譯でこの字を用ゐたのか、誰が用ゐたのかは知らぬが、是又非常に意味深長なことである。之に由つて何を知るか。「命」は即ち「命」である。生き

て居る人格者である。故に日本に於ける眞理とは生きて居るもので、死せる儀文ではない。生きて居るが故に命令を發することが出来る。何と偉いことではないか。日本は眞理を唯組織的に書き並べた國ではない。聖書に「之に生あり」とある如く眞理を人格化し、その御方の詔勅に従つて治められて來た國である。されば聖書に於けるヨハネの言ひ表はし方と我が國體とは全く一致するのである。

我等は唯方法や仕方を説くのではない。生命を説くのである。西洋の如く、あの制度、この説明と七面倒なことを云ふのではない。日本は元々重箱の隅を楊枝でほじくるやうな國でもなければ、微に入り細に互つてくどくしく説明する科學的な國でもない。説明する暇に實行する國である。しやべる間に實行する國であつた然るに現代となつては西洋思想が這入つて來た爲か口角泡を飛ばして論じ立てるやうになつた。

而して目下日本に欠けてゐるのは何が善か何が惡かと説明することが缺乏して居るのであるか。君に忠、親に孝との忠孝の本義に就ての講義が足らぬから不忠不孝の者



が起るのであるか。さうではあるまい。そんなことならば國民はもう充分に知り盡して居る。百も承知二百も合点である。然らば何が欠けて居るのか、それは實行力である生命の缺乏である。今我國で必要なのは此の生命である。

キリスト様は「我は途なり眞なり生命なり」と仰せ給ふて、世人に説明するためなく、生命を與へんがために、自ら生命として我々の間に現れ給ふた。日本人が元々求めて居るのも説明ではなくて生命である。日本では古代から「命」即ち「命」が人を治めた。而も神の言を伺つて之を命令したのである。それであるのに「第一條何々、第二條何々」と如何程箇條書を書き並べて道に撒いたからとて誰も守ものでない善はから、悪はからと説明したからとて、善をなし得る生命を吹き込むのでなければ、國民は悪と知つても止められず、善と知つても行へないのである。されば此の矛盾を感じて居る人はキリストを信ぜよ。キリスト様は我等に生命を與へ、善を成し遂ぐる原動力を與へ給ふ故に悪を棄て、善を取ることが出来る。

今日日本全体に何が缺乏して居るか。神の生命が缺乏して居る。生氣潑刺とした生命に欠けてゐては、如何程人間同志が力んでみても死の權威に壓へられて居る間は駄目だ。されど我等のために死にて甦り、死と陰府の權威を破つて天よりも高く擧げられ給ふたイエス様を仰ぐならば譯もなくやつて往ける。何にも問題はない。

神の道なるキリスト様が我等の心の裏に働く時には實に驚く可き善事が出来る。キリスト様は「わが曰し言は靈なり生命なり」(ヨハネ傳六章六十三節)と仰せ給ふたが聖言を我が裏に受けて居るならば、生命があり能力がある。何と有難いことではないか。

されば日本に於ける純キリスト教、即ち聖書その儘、生命そのものを盡して此の國民に傳へて居る此の基督教は日本國民にはピッタリと合ふのである。私は我國民に印度や支那から渡つて來た、生命を説かない、寂滅を説く宗教を棄て生命そのものであるキリストを信ぜよと勸めてやまぬ。尾島眞治氏も其著「神社正解」の中に言



はれて居る如くに、我が國は元來大本の惟一位の活ける神に事へて居た國であつたが、後世佛教の影響を受けて祖先を神として拜むやうになつた。併し之は決して日本元來の宗教ではない。我等は生命が欲しい。されば生ける生命の神に事ふ可きてはないか。

我等が斯く言ふと同じ基督教界の或者は我等を目して彼等の説いて居るのは低級な耶蘇教だと批評して居るが、我等は彼等の如く、何時迄も十字架に釘つたイエスキリストばかりを説く者ではない、死して甦り今父なる神の右にありて我等のために執成し又我等の中に聖靈を遣つて居給ふキリスト様を傳へて居る。彼等はまた馬槽の中に生れ給ふた歴史的人物としての主イエスより信じてないが、我等は更に進んで現に生きて我等と生命の交渉を保つて居給ふ御方を信じて居る。されば我々の宗教は生々として居るのである。此の御方を信ずる時に罪からも病からも救はれ、靈肉の弱は神の能力によつて強うせられるのである。然らば最後にはどうなる。

(六) 我儕の命なる基督の顯現

「既に爾曹キリストと偕に甦りたれば天に在ものを求むべしキリスト彼處に在て神の右に坐し給へり。爾曹天に在るものを念ひ地に在るものを念ふ勿れ。夫なんちら



は死し者にて其命はキリストと偕に神の中に藏れ在なり。我儕の命なるキリストの顯れんとき我儕も之と偕に榮の中に顯るゝ也（コロサイ書三章一節—四節）

今はキリスト様は靈なるものとして信する者の中に働き、罪に死に切つて居た我等に新生命を與へ、又病める時には觸れ給ふて全き神癒をなして下さる。我等は今このキリスト様を我衷に宿して喜んでゐるが、やがてキリスト様が有形的にまた具體的に顯現し給ふのである。是即ちキリストの再臨である。而してキリスト様が目に見える形をとつて顯れ給ふ時、全世界の政治と宗教とは一致し、國の何處にも害ふことなく傷ることなく、水の海をおほへるが如く神をしろの知識が全地に滿るのである。又妬も嫉もない平和の時代が出現するのである。されば我等は一刻も早く其の時を來らせて戴き度くキリスト様の御再臨を願ふものであるから、日々「主よ速く來り給へ」と祈つて居るのである。そして之は我等にとつて惟一最高の望である。さて此の生命の主なる基督様の御再臨に間に合ふ者となるには今の中に、キリスト様を信じ、一切の

罪から離れて神の生命に滿されて居ることである。

是の故にキリスト教の救とは他のことを意味しない。罪に死せるものに神の生命を與へて生返らしめることであり、救主とは此の生命を與ふるお方のことを云ふ。實際上人々の求めて居るのは他の何物でもない。生命そのものである。又我が國にとつて最も必要なものも説明する人ではなく生命に滿された人である。それには一切の儀文形式を捨て、活きて居給ふキリスト様を信することである。而して此の國民上下一致結束して神の聖旨に聽き従ひ、神が此の民族に與へし重大使命を完全に果し得るやう祈つて止まざるものである。



## 世の終末と聖靈の急活躍

「人地の面に繁衍はじまりて女子之に生るゝに及べる時、神の子等人の女子の美しきを見て其好む所の者を取て妻となせり。エホバいひたまひけるは我靈永く人と争はじ其は彼も肉なればなり然ど彼の日は百二十年なるべし。當時地にネビリムありき亦其後神の子輩人の女の所に入りて子女を生しめたりしが其等も勇士にして古昔の名聲ある人なりき。エホバ人の惡の地に大なると其心の思念の都て圖維る所の恒に惟惡きのみなるを見たまへり。是に於てエホバ地上に人を造りしことを悔いて心に憂へたまへり。エホバ言たまひけるは我が創造りし人を我地の面より拭去ん人より獸、昆蟲、天空の鳥にいたるまでほろぼさん其は我之を造りしことを悔ればなりと。されどノアはエホバの目のまへに恩を得たり。ノアの傳は是なりノアは義

人にして其世の完全き者なりきノア神と偕に歩めり。ノアはセム、ハム、ヤベテの三人の子を生り。時に世神のまへに亂れて暴虐世に満ちたりき。神世を視たまひけるに視よ亂れたり其は世の人皆其道をみだしたればなり。神ノアに言たまひけるは諸の人の末期わが前に近づけり其は彼等のために暴虐世にみつればなり視よ我彼等を世とよみに剪滅さん（創世記六章一節—十三節）

### （一） 行届いた聖靈の御働き

右は全世界が洪水に由つて滅ぼされた驚く可き出来事の少し前の記事である。その三節に「我靈永く人と争はじ」とある。之は實に嚴かな言葉である。あの時ばかりではない。今は尙更神の聖靈は働いて居給ふ。神の聖靈が働いて居るから人々は罪を悟るのである。私がかく申すのは宗教的に罪を悟ることである。酒を飲んで居る人がその結果身体を壊して酒の害を悟るのは聖靈によらずとも常識で解る。又放蕩の結果



貪乏して放蕩の非を悟るのも聖靈によらずとも解る。そんな事は普通一般の道徳によつても悟ることが出来るが、己が犯した罪、神に對して行つて居る罪、不品行ではない不信仰の罪を痛切に感ずるのは普通一般の道徳では悟ることは出来ない。されど聖靈は人々に罪を悟らしめ、之を悔改に導くのである。

今より一千九百年まへに主イエスが此の世に現れて救の途を開き給ふた。主の開き給ふた御救をば信ずるものは誰でも救はれるのであるが、その救の工をなすのは目には見えぬが聖靈なる御神である。此の御方が神の使者等を遣はして人々に神を信ぜざる罪の如何ばかり恐しきかを示す。勿論道徳的にも犯した罪を示し、その罪を有てるものは誰でも神の前には出られないと悟らせ、その罪を本當に悔改めて救はれ度いといふ望を神の前に持つて来るものに、イエス様こそ眞實の救主であることを示す御方は、世の所謂智者學者でなくして聖靈御自身である。

今から千九百年前にイエス様は死して三日目に甦り父なる神の御側においでにな

つてから、その代として聖靈なる神は此の世に降り給ふた。目には見えぬがそれから今日迄ズツと働いて居給ふのであるから、罪を有つて居るものが悔改めて生れ更るといふ驚く可きことが傳道界に於て行はれて居るのである。若し聖靈がお働き下さらなければ一人が生れ更るといふ天的な出来事が起らう筈がない。併し乍ら有難いことには聖靈は何から何迄行届いた工をなして下さり、罪を示して下さり、又イエス様を信ずるやうに仕掛け、信ずるならば後仕末をもして下さるがために其の人は眞實罪から救はれるばかりではなく、聖靈は神の聖言と共に働いて人々に新生命をば吹き入れて下さるのである。之は驚くべきことである。

人類の始祖アダム、エバが造られた時神はアダムの鼻に息を吹き入れ給ふた。その時アダムは常に動物的に生きた(動物的生命の附與)ばかりではなく又心靈的にも生けるもの(永生の附與)とせられたのである。イエス様が甦り給ふた時弟子たちを側に集めて息を吹き「聖靈を受けよ」と宣ふた時のその息は生命の息であつた。



その息は信ずる者の衷に働く處の神の聖靈である。千九百年の昔より今に至る迄正當に神の聖名を呼んだものは皆この息を吹き入れて戴き、罪に死んだものが神より來る靈によつて靈的に生けるものとせられたのである。而してその工は聖靈のなされる工で今も尙續けられてゐる工である。誠に有難いことである。

## (二) 亂れ切つた時代相

ノアの方舟が用意せられ、將に洪水が起らんとする事前、神の聖靈は異様に働いて何とかして人々を罪の滅亡から救ひ度いと御努めになつた。否、争ひ給ふた。人々を滅ぼすことを好まない慈愛の靈が働き給ふたにも拘らず、人々は愈々之を退けるやうになり、暴虐は世に滿ち世は全く道德的にも宗教的にも紊れ切つて了つた。さればその時神は何と仰有つたか、『我靈永く人と争はじ』。之は聖靈が手をお退きなされることを云つたのである。何と物凄しい言葉ではないか。我靈永く人と争はじ。彼等は當然滅ぼさ

るべきものであるのに拘らず、神は愛を顯して彼等を悔改めさせ度いと働き給ふた。然るに人々は之を拒み暴虐と罪惡は世に滿ち、世は亂れ切つて了つた結果、慈愛の神は手を引込めなされるのである。その後に来るものは審判である。人々は己が罪のために死ぬより外途がない。神の靈が手を退き給ふては世の中に生きとし生けるものはたまつたものではない。

私が今このことをお話するのは深い理由がある。今や此の世の有様はノアの洪水前の時の如く暴虐は滿ち世は全く亂れて居ると言つても決して過言ではない。宗教界、道德界は極度に紊亂し、社會の秩序をも組織をも無視して暴れ廻つて居る左傾、右傾の運動は日本のみならず世界に亘つて實に盛んなものである。正義も人道もあつたものではない、人々は己が私利私慾を滿さんために汲々として居る。こんな世の中が何時迄續くのであるか、若し此の有様で永く續くならば此の世の神は惡魔といはざるを得ない。されば我等正義を愛し聖潔を欲ふものは神に向つて『神よ幾何の時を經ん



とし給ふや。何時迄惡魔に對して時を與へ給ふや、神よ、一刻も早くあなたの正義を顯して下さる」と祈らざるを得ないのである。神は義しき御方である。嗚呼、「罪の價は死なり」と仰せ給ひし神は必ずその御言葉通りに實行なさる。油断すべき時ではな

(三) 最後の聖靈傾注

されど一面に於て聖靈は非常に働いてお在でなさる。西洋各國のことは茲では申さぬが、現に日本に於て働いて居給ふことは實に有難いことである。併し又一面に於ては一種の物凄さを感じて居る。

神は四年前に我等ホーリネスの群に聖靈傾注を起し給ふて以來、驚くほど聖書の真理を悟らしめて居給ふ。單に聖書の新しい註釋を與へられたといふのみではなく、聖靈が此の迫れる期を示し主基督の再び來り給ふことの近きを感じしめて居給ふ。我等

は聖書の預言の上から主基督の再臨を信ずるのみならず、感ぜざるを得ない程に聖靈が我等の中に働いて居給ふ。之は我等の間に聖書學者が居るからではなく、凡ての真理を悟らしめ給ふ聖靈がかういふ工合に終末を急いで居給ふのである。私は茲で嚴肅に讀者諸君にお話せねばならぬことは、神はこの日出る處の民を目醒まし此の民を用ゐて全世界に對する使命を全うせんとして居給ふことである。殊に、屢々述べた如く全世界に散在して居るユダヤ人が故國に歸るやうに警告を發し、又積極的に之を援けるのが此日出る處の大和民族であるといふことを聖靈によつて示されてから何とも云へない嚴かな思に滿されて居る。日本人が世界の表に顔を出し世界に對する使命を全うするといふことは唯或る人々の云ふが如く世界平和のためといふ許りではなく基督の再び來り給ふことを早めるために神は此の民族を起し給ふた。

更に進んで云へば、神は此の民族の少數のもの僅か二萬人ばかりのホーリネスの者を起ち上らせ、聖靈によつて神の秘密を示し、我愛する同胞に警告を發せしめて居給



ふ。聖靈は終の日の幾何もなきを識り給ふが故に急いで居給ふ。この民が受けようが受けまいが、基督信者でそれを信するものがあらうが無からうが、此の警告を愛する同胞に發すべきことを私共々に命じて居給ふ。されば我等は主イエスがあとでなさるその時迄警告を發せねばならぬ。それと同時に我等はもう一度注意しなければならぬことは『我靈永く人と争はじ』といふことである。我等は聖靈に動かされて今人々に向つて警告をなし、神に向つては『主イエスよ臨り給へ』と熱誠込めて禱告して居るのであるが、之は長いこと續くのではない。我等はこの儘では行かない。もう僅かの時であると思つて居るから力限り、根限り神に祈つて居るのである、併し乍ら我等をして斯く祈らしめるのは聖靈である。亦我等をして警告せしめるのも聖靈である。されど覺えて戴き度いことは、やがて此の事をお止めなさる時が來るといふことである。『我靈永く人と争はじ』。

#### (四) 恩恵の時、救の日

「かれ曰われ慈恵の時に爾に聽また救の日に爾を助たりと今は恩恵の時なり今は救の日なり」(コリント後書六章二節)。たゞこの言葉だけを聞けば、有難いことだ、今はどんな罪人でも救はれる、又どんな穢れた者でも救はれる、よい時に生れ遇せたものだ、結構な日に巡り遇つたものだ、たゞそんな風に見られるであらう。私とても今より百年二百年前に生れず、今この時に生れ遇せたといふことは千載一遇とも申さうか實に有難いことであると思つて居る。併し乍ら、この言葉の蔭にはどう云ふ思想が潜んで居るか、今は恩恵の時、今は救の日であるが、此の恩恵の時救の日はさう永く續くものではない。總て恩恵の時、救の日が閉されるといふことを暗示して居る。私はこの言葉を以つて人々にイエス様を信するならばどんなものでも救はれ、また永生を得ることが出來るとも傳へするが、それと同時に之は永く續くもので



はない、やがて神は恩恵の御手をお退きなさり聖霊もその御手をお退きなさる時が來るといふことを警告せずには居られぬ。我等の愛する同胞にどうしても此の事を知らせなければならぬ。

先にも申した通り罪惡は此の世に盈満ち、不道德は余りにも行はれ、神をば蔑ろにし、宗教を蔑し、善を換へて偽を云ひ、風俗は紊れ、どうにも仕末のつかぬ時となつて居る。之を思ふ時に於て、こんな世の中が永く續いては大變な事だと思ふ。併し聖霊はやがて手を退きなさると云つて居る。聖霊に手を退かれてから後でどうのかうのと言つても、泣いても吠えても追付くものではない。それならば早く基督を信じて置けばよかつたと思ふ時はもう遅い。近い内に此の恩恵の時はなくなつて了ふ。何時迄もあると思ふな。信者の方々、そのうち然るべき基督教大會で聖潔の恩恵を得ようと思つて居るならば聖潔られそこなつて了ふ。今は恩恵の時、今は救の日だ。『今日エホバに身を献げ而して今日福祉を得よ』。又人々は此の世の中にへバリ附いた思考を

有つて居るために救の日を延ばしくして、遂に未信者は言ふ迄もなく基督信者でありながら、救を受け得ずにこの世を去つた人が随分多いのである。

### (五) 神の義罰は必ず臨む

神が此時『我靈永く人と争はじ』と仰せ給ふたのは何故か。惡魔は六千年の間許し騒がせるに良いだけ此の世を騒がせて來たが、神はいつまでも彼に機會を與へて置き給ふ方ではない。神は聖き御方、義しき御方である。人間の方で望んで居るにも優つて神は一刻も早く己が聖潔を現し度いのである。然るに人々は『ヘン、神なんて在るものか、神が在るならば悪い者を片ツ端から罰しさうなものだ。神なんて無い』と無神論的冒瀆を言ひ、正義人道を蔑し、己が力を恃みて神を頼まず、正義も人道も社會も愛も神もあつたものではないと大きな事を云つて居る。

併し、神は御本質として聖潔を愛し給ふ御方であるから、必ず聖書にある通りに正



義き審判を行ひ給ふ。而もそれが百年二百年後のことではない。聖書を見るならば神が此の世を裁き基督再臨し給ふ時の間近いといふことを知ることが出来る。歐米の政治家や經濟學者も云つて居る如く、西曆一九三三年、一九三四年、一九三五年は最も注意すべき年であると云つて居る。彼等は神を知らざる者等であるがかく申して居る。又無神、無宗教を標榜する彼のロシアでさへ、明年即ち、一九三四年は彼等の軍備が完成する年であるといつて居るではないか。斯の如く未信者でさへ此世は終末に向ひつゝあることを悟つて居る。ノアの時の如く『神世を視たまひけるに視よ亂れたり其は世の人皆其道をみだしたればなり。神ノアに言たまひけるは諸の人の末期わが前に近づけり其は彼等のために暴虐世にみつればなり視よ我彼等を世ともにもに剪滅さん』と。今や世界の終末は近づいた。之を唯宗教家の唱へ言のやうに辨へて居る連中は、世の中を見る眼を持つて居らぬ連中である。一切のものゝ末期は近づいた。醒めねばならぬ。個人としても民族としても醒めてかゝらねばならぬ。世は終極に達し、爛

熟期に達した。而して此の時代は根本から覆されて、新しき時代に今や將に遷らんとして居るのである。醒めよ!! 醒めよ!! 死の眠より醒めよ!!

(六) 今日其聲を聽かば心を剛復にする勿れ

この事をもう少し判然といふならば神の靈が人と争はぬとは如何なる事か。それは人を救ひ、人を潔むる聖靈が手を退き「不義者は不義なる任にし汚穢者は穢き任にし義者は義なる任にし聖者は聖き任にせよ。われ速かに至らん必ず報應あり各人の行ふ所に循ひて之に報べし」(黙示録廿二章十一、十二節)と聖書の一番最後に云はれて居る如くに神が必ず聖手を退き給ふ。今でこそ聖靈は我等のために争つてお出で下さるが、聖靈に捨てられては後の祭だ。若し我等の心の中に、此儘ではならぬ、何とか救はれねばならぬと思つて居るか、それは聖靈が心の中に働いて居るからである。斯く聖靈の招きを聽いたならば其の聲を退けてはならぬ。その聲に應じて神の許に來れ、



聖靈は救はんとして居給ふ。

又聖靈が我々の教會に働いて、祈れよ〜と奨めてお在でなさるならば、聖靈を憂へしめてはならぬ。主よ従ひますと、直ちにその聲に従へ。而して祈禱に身を渡すものとなれ。又聖靈が我々の群の中にリバイバルを起さんとして居るが、それに水をかけ、それを妨げるやうな言葉さへ出してはならぬ。之は恐るべき事である。聖靈に手を退かれた教會は所謂燈臺を奪はれた教會である。さういふ教會は、志を挽回せんとして挽回する能はず、遂に恩恵を受けそこなつた人のやうに棄てられて了ふ。

聖靈が我々銘々の心の戸を叩いてお在でなさる中に、醒めて聖靈の云ひ給ふことに従へ。お、若しそれに従はずに舊い型や己の智慧や自己經驗に頼つて居るならば、聖靈は手をお退きなさる、實に恐るべき時である。何はともあれ、聖靈の御聲にのみ従ふべきである。

### (七) 最も生甲斐のある生涯 Ⅱ 警告者

私は更に聲を大にして國民に叫ぶ。實に神は大なる期待をこの國民にかけて全世界に對し驚く可きことをなさしめんとして居給ふに拘らず、唯自分の一黨一派のことのみを考へて居るならば聖靈は手をお退きになる。私は之を日本の基督教會に向つて呼びかけるのみならず、我民族に對しても之では不可ぬ、日本の使命はこんなものではない。日本の國は聖靈に示されてある使命があるから之に従つて醒めよと叫ぶのである。今は我國にとりて非常時である。日本は世界を相手に立ち上つて居る。然るに一種の宿命説を信じてどうにかなるだらう、何とかなるだらう等と云つて居るべき秋ではない。神の思召を知り、萬事萬端聖書の光により如何に事が進んで行くかを判然と知つて、その光に従つて歩むべきである。

早晚聖書の預言は文字通りに成就する時が来るから必ず驚くべき禍が全世界に臨



むであらう。その時我日本はその禍から免かれるか。否、その禍は全世界に來るものであるから、日本も同じくその禍を蒙らねばならぬ。神の選民でさへ大患難に遭ふのである。祝んや我が愛する同胞に於てをや。

併し乍ら我等は茲でハツキリして置かねばならぬ一事がある。患難は必ず來る。併し今我等が力を盡してユダヤ人のために祈りまた之がために盡して居るならば、神は必ず來るべき怒りの時代に於て、今我等の捧げて居る熱血を吐露した祈に應へ、その患難の日を少くし、亡ぶる人間を少くして下さることを知つて居る。だから我等は祈らざるを得ないのである。

我等の祈つて居るこの禱告は、今も或程度迄は現實に應へられて居るであらうが、やがて來る大患難の時に神は我等の祈を聽き必ず此の患難の日を僅少くして下さるといふことを我等は固く信じて居るのである。今聖靈の聖聲に聞き従ひ神を信じて救はれたものは、恰もノアとその家族八人のみが大洪水の時に救はれた如くに、來るべき

患難に遇はずに済むのであるが、それ以外のものは何人と雖も此の禍を免るゝことが出來ない。併しその時、オ、どうか、愛する我同胞が僞キリストに騙されることなく、神の選民なるユダヤ人に與し、本當に神の側に立つものが一人でも多からんことを希つて止まない。之を思ふ時、我等の禱告、又我等の努力は決して無駄にならぬ、讀者諸君、此の大使命のために祈り、又此の使命を國民に警告する群に加はり度くはないか。斯くてこそ此の國に生を受けた者として眞に價値あるものである。それには今聖靈に愛せられ、顧みられて居る此時、有てる罪を悔改め、キリスト様を信じて全く救はれ潔められて聖靈に満されることである。されば神は直に我等をして此の尊い祈禱の群の一員として重大なる禱告に當らせて下さる。之は又神の需めて居給ふ處である。願くは今直に此の神の需めに應ぜんことを!!



## 基督信者の空中携擧

「我なんぢらに告ん其夜ふたり同床に在んに一人は執れ一人は遣さるべし。二人の婦ともに磨ひき居んに一人は執れ一人は遣さるべし。かれら答へて曰けるは主よ此事何處に有や彼等に曰けるは屍の在ところには驚あつたらん」

(ルカ傳十七章卅四節—卅六節)

## (一) 神の教會とは何ぞや

實に今や世界は文字通りの非常時であつて、豫期せざる突發事件が引切無しに起り而もそれが局部的のものでなくして世界全體の動として急轉直下の勢で萬事が變りつゝある。人々は此次は何、その次は何と恐怖の念を以つて來らんとする事件を俟惱

んで居る有様であるが、何といつても近々起る所の世界的大事件は基督信者の携擧である。携擧と申しても或人々には聞き馴れぬ言葉で解らぬ者があるかも知れぬが、それは人々の知らぬ間に基督信者が空中に携へ擧らるることである。然らば如何なる者が携へ擧らるのであるかを聖書の示す處に隨つて記述して見よう。

先づ聖書の上から世界の人類を三つに分けることが出来る。その一つはユダヤ人で之を神の選民といひ今より約四千年前に神はアブラハムといふ義しき人を選んでその人の子孫を神の特選の民となし之をイスラエル人と呼んだのである。それが今日に至る迄續いて目下全世界の各地に一千八百萬人ぐらひのイスラエル人が住んで居る。今日猶太人と呼ばれて居るのがそれである。次にこのユダヤ人以外の世界の人間を總稱して異邦人、英語では Gentiles と呼ぶ。亞細亞人、歐米人、亞弗利加人など悉く之に屬するのである。その次ぎはユダヤ人の中から、異邦人の中からと基督を信じて救はれた者等の集合體を神の教會と呼ぶ。即ち全世界の各種族、各國民の中からキリ



ストを信じて救はれた各人より成り立つ神妙なる團體を教會といふのであつて、神の前にある生命の書に名を記されたる者、而も管に名を記されるのみならず住家を天に移されたる者の集合體を言ふのである。されば聖書には教會のことを「天に登録せられたる長子どもの教會」とも云ひ、或は又「世より選びたるもの」とも謂ふ。是故に教會とは世間の所謂何々教派といふことでもなく、又教會の建物を指すのでもない。何々教會と名の附いた立派な建築物があつて、その教會の會員名簿に判然と名を記してあつても神の教會の會員であるとは言ひ得ないのである。

或は又聖書には教會をばキリストに聘定せられた花嫁であると記してある。やがてキリスト空中まで再臨なさる時に携へ擧げられてキリスト様にお目にかかりそこに於てキリストと花嫁なる教會とは全く一體となるのである。されど今は異邦人、選民の中に、或は又有名無實の信者の間に伍して住んで居るが、やがて天に登録せられたる眞の教會は空中まで携擧せられるのである。

(二) 携擧せられる者の資格

目下全世界には基督信者と名のつく者が約五億萬人程住んで居る。併しその中●どれ丈の者が基督再臨の際携へ擧げられる信者であるかといふことは神のみ知り給ふ處であつて人間は誰も之を數字的に書き現すことは出来ない。

世間では基督信者が何か不道德なことでもすると基督信者でありながらあゝしたとか、こうしたとかと非難する。それは基督教は昔から高い道德率を示して來たゝめであつて、基督信者が万一間違つた事をしたならば世間が非難するのは當然である。佛敎信者が酒を飲んでも佛敎信者ともあるものが酒を飲むとは怪しからんとは誰も云はぬが、基督信者が何か失敗をすると直に揚足をとるのは高い標準の道德を説いて來た手前當然のことである。併し乍ら世間から一パン基督信者と思はれて居り、自らも長い間教會に通ひ聖日嚴守、什一獻金などして居つても、その事の故に必ず空中まで



携へ擧げられる資格ある人であると云ふことは斷言することは出来ない。

然らば如何なる人々が携擧せられる信者であるか？ 嚴密に云ふならば信者自ら之

を承知して居る筈である。「信仰に由てエノクは死ざるやうに移されたり神これを移し

しに由て人見出すことを得ざりき彼いまだ移されざる先に神に悦ばるる者と證せられ

し也」(ヘブル書十一章五節)。このエノクは教會の型であつて、彼は昔ノアの時代に全

人類が洪水によつて滅ぼさるる少し前に死ざるやうに天に移されたのであるが、眞の

基督信者も將に來らんとする患難時代に遭遇せずして携擧せられるのである。而もエ

ノクは移されざる先に神に悦ばるゝ者と證せられて居つた如くに、携へ擧げらるゝ信

者も今のうちから判然と携擧せられるといふ神よりの證明を持つて居るものである。

それはキリストを信じて罪より救はれ神の聖靈を心の中に宿し、又神の聖旨を辨へ

て神の前に斷えず禱告の祈をして居る者が其資格者である。かゝる人は世間の者は知

らずとも本人と神様には克く解つて居るのである。併し世間からあれでも耶蘇信者か

(三) 惡魔を恐れしむる信者

といはれる様なヘツポコ信者では資格者といふことは出来ぬ。あれならば本物だといはれる程キリストの姿がその人の中に寫し出されて居なければならぬ。使徒パウロは之を「キリストを知るの香」と云つたが、魚屋の前を通れば生臭い香がするし、天麩羅屋の前を通れば天麩羅の香がするやうに、眞の基督信者にも世間の人が嗅分けることの出来る基督の香が發散されて居らなければならぬ。

主キリストは眞の信者を指して「爾曹は地の鹽なり、また世の光なり」と仰せ給ふた。世間の人は基督信者の存在がこの世にとつて如何に大切なものであるかといふことを知らずに居る。併し基督信者の存在の價値をよく知つて居る者は神様は勿論のことと惡魔が熟知して居る。この惡魔といふのは今より六千年前から此地球に近づいて來てあらゆる惡事をして來たのである。神はすべての物を生かし、且之に生命を與へる



お方であるが、之と反對に悪魔は凡の人を死なしむる、言ひ換ればおん坊の役を勤めて來たのである。又彼はあらゆる罪惡の創立者であり、人々に悲み、哭き、妬み、嫉み憂ひなどを與へるのはみな彼の仕業である。併し此悪魔にとつて一番嫌なのは基督信者に此世に居られることである。世間の人々には基督信者の存在は何等價値なきもの如くに見える。思想界、政治界、學術界などに何等の波動をも及ぼしてゐないやうに思へる。穢い言葉で云へば、人々は鼻もひつかけぬといふ有様であるが、我等の存在は神様に對しては悦ばるゝ存在であり、悪魔に對しては一大脅威である。悪魔は信者が聖靈に満されて「爾國を來らせ給へ、惡魔を滅ぼし給へ」と祈る事を一番嫌ふのである。何故であるか、それは彼の壽命が縮められその滅亡が早まるからである。

聖書の或る個處には聖靈のことを「抑ふる者」と記してある。聖靈は今悪魔が跋扈することを或る程度まで抑へて居給ふのである。悪魔は遂には人格を取り偽基督となつて此世に現れ超自然の力を以つて世人を惑はすのであるが、そこまで至らぬやうに

抑へて居るのは聖靈である。而も神はこの工を御自身直接なさるといふよりは、聖靈に滿された聖徒を通してなして居給ふのである。されば基督信者の存在こそは或る程度に於て不法の靈の跋扈を防いで居るのである。即ち基督信者が居ることによつて此世は穩かに治まり、腐敗を防ぎ、累卵の危きより救ふて居るといふことに就いては世間の者には解らないのである。或る町に一人の基督信者が居る事に因つて其町の人々は猫の尻尾ほどにも思つてないかも知れぬが惡魔にとつては頗る煙むたいのである。又基督信者が村々に傳道に出掛けるとすると村民は之を厄介視するかも知れない。併し惡魔にとつては實際氣味が悪いのである。

私は數日前或る新聞に「兒童と信教問題」と題して寄稿した。其の内容は最近文部省では兒童に神社參拜を強要する新法令を出したのであるが、之は憲法に定めてある信教の自由に抵觸するものであるから反對したのである。愈々明日から新聞に掲載するといふ前夜新聞社から電話がかゝつて「愈々明日から掲載致しますが何卒御注意



を願ひます」といつて来たから私は直に「覺悟して居るよ」と返事をして置いた。  
私は此事に就ては覺悟をきめてかゝつて居る。また此の問題に就て、最近或る處に  
基督教各派幹部の者が集つて協議したが彼等はもつと事件が具體化せなければ問題と  
なすには早いと一向に氣乗り薄なのを見て私は物足らなく感じた。私は以前から  
信教の自由のためには生命を賭してかゝつて居る。之がために國賊呼はりされる位の  
ことは何とも思つてゐない。併し全智全能、至善至愛の神様は私をして使命を全う  
せしむる迄は彼の惡しき者に指一本觸るることを許し給はぬ事を確く信じて居るから  
少しも動ぜぬのである。

讀者諸君に云ふ、どうせ信者になるならば惡魔に恐れられるやうな信者となれ。然  
らずして世間の手前を憚つて、言ふべき事をも云ひ得ずに居るやうな信者ならば、始  
から信仰せぬ方がましである。惡魔から此奴に物言はれては、此奴に祈られては堪ら  
ないと彼が齒をむき出してかゝつて來る位の信者となるならば洵に幸なことである。

#### (四) 國王及び國民のために祈る

神が我等基督教者を此世に住はしめ給ふ理由は、我等によつて此の六千年來全世界  
を搔き廻して來た惡魔を滅ぼし、神の榮光が一刻も早く此の地上に顯れるために我等  
を用ゐ給ふのである。而して我等の神に對する最高の奉仕は祈ることである。惡魔も  
之を知つて居る。彼は喋るものは恐れないが、神の前に熱誠こめて祈るものに對して  
は恐れ慄くのである。

神は我等個人／＼に使命を與へて居給ふ如くに國々に對しても夫々使命を與へて居  
給ふ。我等は此の國が頗る重大な使命を與へられて居ることを神より示されて實に嚴  
かに感じて居るものである。されば此國が外敵から護られて、此の重大使命を完全に  
果し得るために熱心に神に祈つて居る者である。世間が何と思つて居るか知らないが  
我等は世間から忠義な者だとか、偉いものだとか思はれたいからやつて居るのではな



い。國のために祈ることは神様から要求せられて居るから成すのである。

「われ殊に勸む萬人の爲に頌告、祈禱、懇求、感謝せよ王および凡て權威を有もの爲には別て之を行べし」(テモテ前書二章一節)之は命令であつて神は我等に全國民のために祈ることを要求して居給ふ。殊に天皇陛下を始め國政に當つて居る文武官のためには別て之を行せよと云はれてあるから我等は祈るのである。

この事に就て一例を擧るならば今の皇太后陛下が未だ皇太子妃殿下で在した頃腸チブスにお罹りになつた事があつた。それより先妃殿下が御成婚なされる時基督信者であつた一人の學友に「今後私の責任が重くなるから是非私のために神に祈つて欲しい」といはれた事を漏れ承つて居たので、御容態篤しと聞くや私共数名の傳道者等は葉山に於て斷食徹夜して御平癒を神に祈つた。然るに其翌日の新聞を見ると御容態は朝の六時頃から全く變つて快くなられたと報じてあつたので一同大に感謝した事であつた。朝の六時とは丁度その頃まで我等は祈つて居たのであつた。

私は昔から神社問題に就て喧しく云ひ私を出して居る「きよめの友」(週刊雜誌)誌上にも屢々此問題を掲げて論じて來たので、警保局では私を怪しからぬ者と思ひ、おまけに柏木に住んで居るから赤い連中ぐらひに思つたのか、或る時一人の探偵を私の處へ遣はして「貴方は天皇陛下をどう考へられるか、神社をどう思はれるか」などと色々質問した。その時私は前述の事件のあつた直ぐ後であつたので之をその探偵に話した處が、彼はそれ丈を聞いて「私は警保局から遣はされて來たものですが、實は貴方も赤い連中であると思つて居た。然るに今の話を聞いて實に天皇に對して忠義な方であることが解りました」と云つて歸つて行つた。そしてその事を當時の警保局長であつた有松さんに報告した爲であつたか有松さんから電話があつて、「有松個人として貴方にお會ひし度いから來て下さらぬか、若し貴方が忙しければ當方からお伺ひしても良い」と云つて來たので「何に私の方から出掛けませう」とお答へして伺つた。それから有松さんとは心易くなり基督の救の話をもなした事であつた。



今は我國にとりて非常時である。重大問題が次から次へと起りつゝある此際我等は此の國のために力を盡して祈つて居るものである。我國民の中には國家のために貢献する多くの方々が居るが、神に祈るものは極く少ない。併し神は最も祈る者を需めて居給ふ。此國の運命を重荷に思つて神の前に出て祈る者が一人でも多くなれば、神は祈に答へて全能の聖手を延べ此國全體を如何なる處よりも護り助け給ふ。我等は又此國民が罪惡と偶像から離れ、活ける眞の神を認めて、神が與へ給ふた重大使命を完う得しるよう日々祈つて居るものである。

### (五) 携擧後の地上の大混亂

やがて患難時代といふ新時代が来る。その時に永らくの間此世を惱まして來た惡魔が徹底的に審かれ彼の代に基督が此の世を支配なさるのである。患難時代の期に全世界の人類は前代未聞の苦患に遭ふのであるが、この試練を経て人々は神を認めるやう

になるのである。されど今神を信じて救はれ聖靈に満たされて、「爾國を來らせ給へ」と祈つて居る神の教會はその時には此の患難に遭はずして神の御許に携へ擧げられるのである。而して此携へ擧げらるべき花嫁たちは今の世に於ても來るべき患難時代に對して重大責任を感じ、惡魔が速かに滅ぼされると共に全世界の人間が受くる苦患の期を少くして下さいと祈つて居るのである。然るのち患難時代は終つて又となし平和な時代が來るのであるが、その時はキリストの花嫁なる教會はキリストに偕に再び此の世に來つて此の世を治めるのである。

さて茲では携へ擧げられる者よりも殘される者に就て申し上げ度い。世界には多くの人間があり、又基督信者と名の附いたものも多く居るがその中の何人が携へ擧げられるか知らぬが、兎にも角にも突如として此事が行はれる。「其夜ふたり同床に在んに一人は執れ一人は遺さるべし」。夜二人の者が寢て居る中に行くぞとも告げずに一人は去つて行くのである。又「二人の婦ともに磨ひき居んに一人は執れ一人は遺さるべし」。



し。二人で白挽いて居る時に急に白が重くなつたのでどうしたのであらうかと気がついて見た時には相手の者が居なくなつて居るといふのである。また畑に居らうが、會社で事務を取つて居らうが、天に住家を持つた眞の信者は世の人々の知らぬ間に失せて了ふのである。その直後の地上に於ける混乱はどんなものであらう。東京ならば警視廳が搜索願のために大繁忙を來すであらう。否、それ程東京から携へ擧げられる人があれば幸だが。

そのとき世間では豫々携擧といふことを聞いて居たが、この事か。本願寺の者ではない、基督信者のものが携へ擧げられたのだと気が附くものも起り、之はキリストが空中まで來て居給ふのだと醒めて晩時きながら神を信じて救はれるものが起らぬとも限らぬ。併し中には、携擧などと人々を威して居るのであつて、彼等は山か何處に隠れて居るのであるから今に出て來るであらうと多寡を括つて居る者も起るであらう。併し大多数の者は不信仰の儘であるから例へ斯る事件を見せられ、また死人が甦

るやうな事があつても醒めて神を信ずる氣にはならぬであらう。何せ基督來る時には「信を世に見んや」と云はれてあるから人々は偶像、邪神に眼をくらまされて仲々神を信ぜぬのである。またその時には此の世の中には最早禱告者は居らず、神の御怒を宥んがために神の憐憫を求め、神の前に手を擧げて祈る人は居らなくなるから、此の世は實に慘憺たる有様と化するのである。

勿論その時にも教會の建物はその儘であらう。今でも聖靈を抜きにして無味乾燥にやつて居る教會は矢張その時まで續くかも知れない。日曜日の朝にはいつもの様に鐘を打つて人々を教會に集め、牧師はお座なりの説教をする。それを見る時に人々は「何だ、携擧などと騒がして居るが、いつもと變化はないではないか、教會は今迄通りに、毎日曜日の朝集會を持つて居るではないか」と晦まされる者が多いかも知れぬ。併し私は云ふ、如何に立派な牧師の説教を聞いても、もはやその時には神の聖靈は手をお退きになり禱告者も警告者も居らぬ時であるから、どんなに泣いてもわめいて



も人々が救はれるとか潔められるとかいふ天的な工は行はれぬであらう。若しもさうであるとするならば何と惨めなことではないか。而も一方に於ては神の義しき審判は容赦なく人々に臨むのである。

(六) 爐の如くに焼く日來らん

屢々述べて來た如く患難時代といふ新時代は必ず近々に全世界に臨む。それは世創つて以來後にも先にもなかつたといふ大なる患難の期である。

何故に神は斯る大困難を地上に來らしめ給ふのであるか？ それは神が此全地を吹潔んがためである。「されど其來る日には誰か堪えんや、その顯著る時には誰か立えんや、彼は金をふきわくるものゝ火の如く布晒の灰汁のごとくならん」(マラキ書三章二節)又「萬軍のエホバいひたまふ視よ爐のごとくに焼く日來らん、すべて驕傲者と惡をおこなふ者は藁のごとくにならん其きたらんとする日彼等を焼つくして根も枝ものこ

らざらしめん。されど我名をおそるゝ汝らには義の日いで、昇らんその翼には醫す能をそなへん、汝らは牢よりいでし犢の如くに躍跳ん」(全四章一節二節)。今は神様は悔い改めてキリストを信する者の中に働いて我等の心の中から一切の罪の禍根を除いて下さると共に聖靈によつて全く潔めて下さるのであるが、やがて神は此世界から惡魔と惡魔が植付けた一切の罪、穢れを悉く除き去り給ふのである。惡魔は六千年の間神様が自ら御創になつて甚だ御満足なされた一切の受造物を悉く蹂躪して來たのであるが、神はもう一度、惡魔に破壊せられし天地萬物を以前の榮光に歸さんために御獨子なるイエスキリスト様を十字架に釘けて贖業の大完成の土台を据へ給ふたのである。やがて具體的に改造の工がなされるのは患難時代に於てである。この改造の後に来る時代を千年王國時代といふ。而してその時代には神の選民なるイスラエル民族(今のユダヤ人)を中心に世界に平和の時代が出現するのである。されば患難時代とは全地が吹潔められ、萬國民が震動はれる時であるが、聖書を見るならば「我すなは



ち命を下して篩にて物を篩ふがごとくイスラエルの家を萬國の中にて篩はん一粒も地に落ざるべし（アモス書九章九節）とあるから特別に此の時に於てユダヤ人が激しい苦患を通して吹潔められ而る後にメシヤ即ちキリストを認めて國民的に神に立歸つて來るのである。

而もこの患難の時代には精神的にも物質的にも非常な惱がある。聖書にはその時の有様が委しく書かれてある。即ち地震、饑饉、疫病、猛獸、戦争などのために世界の人間の三分の二は斃されると記されてある。世界各国はユダヤ人の富を争奪せんとしてアジア、アフリカ、ヨーロッパの三大陸を結びつけたパレスチナからユーフラテス河畔を中心として大戦争を起すのである。併し遂に神はユダヤ人に敵する國々を打倒して患難時代の終に全くユダヤ人を救ひ給ふのである。

聖書には又その時の有様を記して『また第六の封印を開し時われ觀しに大なる地震あり日は毛布の如く黒なり月は血の如くなれり。天の星は無花果の樹の大風に揺て未

だ熟せざる其果の落るが如く地に隕、天は巻物を捲が如く去ゆき諸山諸島みな移てその處を離れたり。地の諸王また貴人、富者、將軍、勇士、すべての奴隸すべての自主ことごとく洞に匿れ山の巖の中に匿れ、山と巖とに曰けるは願くは我儕の上に墜われらを掩ふて寶座に坐する者の面と羔（基督）の怒を避しめよ。この羔の怒の大なる日すでに至れるなり誰か之に抵ることを得んや（黙示録六章十二節—十七節）とありこの恐るべき患難は全世界に臨むのである。されば我國だけが此の禍から免れるといふことは到底出來ぬのである。

併しこの患難の時にも我が國民にとつてたゞ一縷の望は、我等がいま力を極めてイスラエル國民のために神の寛恕を乞ひ患難の日にも憐憫の故にその日を少くなし一刻も早く國を彼等に還し給へと祈ることの故に我が國民全體を願ひ給ふのである。『爾曹わが此兄弟の最徴者の一人に行へるは即ち我に行しなり』と云ひ、また『冷かなる水一杯にても飲する者は必ず其報賞を失はじ』と仰せ給ひし主イエスは我等が熱



誠こめて彼等のために禱告することの故に、やがて来る萬國民の審判の時にも此の國を顧み給ふのである。我等はまた我が國が假へ全世界を向ふに廻はして戦ふやうなことがあつても、飽迄もユダヤ人の側に立つて彼等の建國を援けるために用ゐられるやうにと祈つて居るのである。而して神は必ず我等の祈禱に應へてその如くなし、また我が國全般の上にも顧を與へて下さるとの大なる期待を持つて我等は携擧の瞬間まで祈りつゞけるのである。

(七) 空中に於ける華やかなる會合

患難時代を前にして行はれる世界最大の事件は基督信者の携擧である。之は世人にとつては大なる驚愕である。併し携へ擧られるものにとつては突發事件には相違ないが、聖靈に滿され、神の聖旨を辨へて禱告して居る者には寧ろ當然の歸結である。その時我等の肉體は瞬間的に榮光の體に化せられて神の御許に昇り行くのである。彼處

には既に地上の苦闘を終へて世を去つた代々の聖徒等が集つて居る。末のラツバ鳴ん時、墓開けて地上にある體と今バラダイスに行つて居る彼等の靈魂とが一つになつて甦り、又我等も朽ず汚れざる榮光の姿となつてキリストの御前に相集ふのである。その時我等は久しく俟つて居つた主キリストを肉眼を以つて見奉り、また我等の愛する新郎なるキリストを圍んで、千々萬々の天使たちの四方より集められた聖徒たちと共に、羔イエスを讚美する歌を唱ふのである。

彼處には又婚姻の席が設けられてありそこに於てキリストと花嫁なる教會とは完全に一體となつて、最早離れることがなくなるのである。そこには涙も、憂も、病も、争も、悲もなく、その代に稱讚と尊貴と榮光と讚美とがあるのである。而も之は一時的の現象ではなく、『斯て我等いつまでも主と偕に居ん』とある聖言通り、に永遠にキリストと偕に天に住ふのである。ア、何たる榮光ぞや



## (八) 千年王國時代の出現

かく天上に於ては麗はしい光景が演ぜられるが地上には恐るべき患難が臨む。而して天上の榮光は永遠的であるが、地上の患難が永く續けば人種は絶えて了ふ。併し神は今此世に在て祈つて居る我等の禱告に應へてその日を少くして下さる。さればそれは僅か七年ぐらひで終るかも知れぬ。然る後に來るのは千年王國時代である。神は基督の十字架の贖によつて惡魔が破壊したる物を悉く回復し此の世の智者、學者の夢想だにせなかつた完全なる世界を造り出し給ふのである。その時國は國にむかひて劍をあげず、再び戰鬥のことを學ばなくなり、その故に國の何處にも害ふことも傷ることもなくなり、誑はれし地は全く醫されて、荒野に水わきいで沙漠に川ながるゝやうになる。又キリスト御自身、大能の神、とこしへのち、平和の君となりて公平と正義とを以つて世を治め給ふが故に、人々は歡善と樂とを得、悲哀となげきとは逃

さるのである。その時に不用なのは軍人、牧師、醫者などである。世は益々繁昌し、人々の健康は増進するから百歳で死ぬるものも若死だと云はれる時代となる。流産はなくなり産兒制限などする馬鹿者は一人も居らなくなる。世界は皆エデンの花園の如くになり農業が頗る盛になる。聖書の中にある獅子が藁を食ふといふ言葉も劍をうちかへて鋤となし鎗をうちかへて鎌となすといふ言葉も農業の旺んになることを意味して居るのである。而もこれは決して空理空論ではない。必ずかゝる時代が此の世に出現するのである。而して携へ擧げられた聖徒たちはキリストと偕にその時代を治めるのである。その時世界の政治、經濟、宗教の中心はエルサレムとなり、ユダヤ人がその時おもに用ゐられるのである。

我等は今救はれ聖靈に滿されて聖書の中から斯る時代の間近に來ることを示されて居るから神に向つて熱心に「爾國を來らせ給へ、惡魔を滅ぼし給へ」と祈つて居るのである。我等には轉り變る様々の此の世の出來事を超越して近々に神の國が出現する



といふ大希望を抱いて居るから決して失望落膽はない。愈々希望に燃えて「主よ速く来り給へ」と祈り續けて居るのである。

神は我等に「何を食ひ何を飲なにを衣んとて思わざらふ勿れ。此みな異邦人の求る者なり爾曹の天の父は凡て此等のもの、必需ことを知たまへり。爾曹まづ神の國と其義とを求よ然ば此等のものは皆なんぢらに加らるべし」(マタイ傳六章卅一節—卅三節)と命じ給ふた。我等は異邦人と異り住家を天に置く處のものである。異邦人は此の世を唯一の働き場となして居るに引換へ、我等は只管神の國と其義とを求めて居るものである。神は斯るもの、祈禱を聽いて平和の御代を速かに來らせ給ふと共にかゝる祈禱者をば患難時代の前に天に携へ擧げ給ふのである。

未だ信仰せざる方々に云ふ、諸君は携擧の恵に與り度くはないか。若しもこれに與りたければ犯せし一切の罪を悔改め、我等の罪の身代となつて救の途を開いて下さつた基督を信じて全き救を得ることである。そして熱心に神の國の出現を祈るものとな

れ。信者の方々に云ふ、世にへバリ着いた考を持つて此の世に腰をよろして居ては大變である。かゝる者はやがて末のラツパ鳴らん時に、根を地に張つて居ることの故に携擧に間に合はずに取り残されるかも知れぬ。我等は主基督を何物にも勝つて愛すること、神の國を望んで断えず熱心に祈ること、に努めなければならぬ。

「主イエスよ速かに來り給へ」といふ祈禱こそ我等が主に會ふ準備中の準備である。されば主はかく祈る者を間違なく携擧の際に携へ擧げて下さるのである。

## 民族への警告

終



### 此の書物を讀了た方々へ申し上げます。

此の書物を御覽になつた上、自分も基督を信じて救はれ度いと云ふ願念を持たれた方は、聖書の中に『凡て主の名を呼び求むる者は救はるべし』といふ聖言がありますから、何處でも宜敷しいイエスキリスト様の名を呼んで、神と人との前に犯した自らの罪を告白すると共に、私を救つて下さいと聲を出してお祈りなさい。されば神様は約束通りに必ず貴方をお救ひ下さいます。

尙ほまた委しく聖教に就て聞き度いといふお方は、**全國ホーリネス教會所在地の附録を挿入してありますから、それを御覽になつて最寄の教會の所在地を知り、そこを御訪ねになるか又は要點を書いて手紙でお問合せ下さいれば、私共はよろこんで、御導きをしてお助け申して共々祈禱する様に致します。**或はまた直接に左記の處へ御出で被下か手紙でお問合せ下さいましても喜んで御導きを致します。

附録を御入用な方は郵券一錢五厘添へて左記へ御申込みになれば直に御送附申し上げます。

東京市淀橋區柏木三丁目三九一

聖書學院

Printed in Japan

昭和八年七月廿一日印刷納本  
昭和八年七月廿五日發行

再訂版

定價金拾錢  
送料金二錢

著者 中 田 重 治

東京市淀橋區柏木三丁目三九一

發行人 清 水 是 非 三

東京市淀橋區柏木三丁目三八六

印刷人 小 關 謙 六

東京市淀橋區柏木三丁目三八六

印刷所 ホーリネス教會印刷部

東京市淀橋區柏木三丁目三九一

發行所

東洋宣教會  
ホーリネス教會出版部

振替口座東京七七八一四番



純基督教宣傳の月刊新聞

# 天 國 新 聞

毎月一回一日發行(定價壹錢)  
一ヶ年分 郵税共 拾八錢

世は益々混沌學說多岐に亘るも一として眞の教を得の道なし。斯る時代に本紙は頗る平易にして而も確固不動の安心を得るの道を示し、且つ個人のみならず、國家、民族に對しても基督教信仰に由る救世済民の道を提唱する。中田重治先生の論說、聖書の平民講解、新生、神癒等の實驗談、時代相の解剖等々掲載せらる。

中田重治先生著

## 聖書より見たる日本

四六判 百七十四頁  
定價五十錢送料六錢

本書は他に類例を見ざる驚くべき書である。そは人智に由れる研究又は杞憂よりの所産にあらずして、聖靈なる神の指導によつて書き記された書であるからである。我が國存続の理由、現在及び今後に於ける此の國に與へし神の使命を示し、今や我が大和民族は國民的に覺醒して起たねばならぬ秋であるとして頗る鮮明且つ系統的に國民的使命を啓示してゐる。「民族への警告」を讀まれし諸士は是非々々本書を閲讀せられよ。之は又全國民必讀の啓蒙的著書である。敢て江湖に薦む。

純福音宣傳の週刊雜誌

## きよめの友

毎週木曜日發行(定價五錢)  
半年分郵税共 壹圓貳拾錢

三十數年前より續刊されて來た純福音指導雜誌、毎回中田重治先生の寸鐵肺腑を突く警句。預言、警世、鞭撻等の論說及び説教筆記。聖書日課。翻譯物、教會時報。海外ニュース。最近の靈潮。基督教界の消息。證詞。各地基督教大會案内等々。  
基督教者となれるものの必讀雜誌。

一九三目丁三木柏區橋湊市京東

部 版 出 會 教 ス ネ リ 一 水

番 四 一 八 七 七 京 東 替 振

所 行 發



終

會教スネリ一本  
行發部版出